

窮屈な二度目の人生過  
ごしています

海野

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

不自由無く過ごしていた私こと、中島海里は不幸な事故で死亡……したはずなのに、二度目の人生を貰ってしまった。しかも、それは漫画の出てくるキャラの成り代わりとかどうかという事!?

暗殺教室を読んでいたらふと思いついたというお話です。

一度やってみたかった成り代わり!

リボーンの小説も書いていますが、全く進んでいません。更新ペースは遅めです。

# 目次

第一話	赤鉛筆	1
第二話	お母さん	5
第三話	ノア	9
第四話	赤髪の少年	14
第五話	蓮	18
第六話	オタクの法則	21
第七話	メイドカフェ	25
第八話	体育祭と学園祭	32
第九話	下の名前	37
第十話	錆びたレール	42
第十一話	兄	46
第十二話	復讐なんて	51

第十三話	夕日	55
第十四話	娘	59
第十五話	集会	66
第十六話	聖地巡礼	70
第十七話	テスト前	74
第十八話	テスト当日	77
第十九話	リストバンド	82
第二十話	ビー玉	87
第二十一話	パルプンテ	91
第二十二話	ウソつき	97
第二十三話	死神	103
第二十四話	本物	108
第二十五話	幼い私	116

第二十六話 本気で

—————

121

第二十七話 期末テスト

—————

128

第二十七話 家族

—————

132

# 第一話 赤鉛筆

私の名前は、中島海里。生活にも、人間関係にも特に不自由は無いただの高校生だ。

家族は、母と父と兄が一人と言った一般的な家庭で、近所には幼馴染の子も居る普通の女の子……だった。

何故、過去形なのか。それは簡単な話だ。だって、さっき私は不幸な事故で死んだからだ。本当に不幸な事故だった。幼馴染といつも通り通学路を歩いていて。その日は大雨が降っていて、傘をさしていないとビチャビチャに濡れる最悪な天気だったのを覚えてる。

横断歩道を渡る時、走っていた車が大雨で濡れた地面で滑り、その車が私達めがけ来たのだ。一瞬の出来事だった。

さて、その後、私はどうなったのか？それは想像もつかないだろう。だが、こんな言葉は聞いた事があるだろう。『輪廻転生』死んで、あの世に逝った魂が、この世に何度も生まれ変わる事だ。厨二くさいが、本当にあったのだ。それを私は体験した。だって、今、幼稚園で歌を歌っている最中だからだ。

「次は手のひらを太陽に、歌ってみようか！」

「はーいー」

手のひらを太陽にか。この曲は有名だ。高校生の私でも知っている曲だ。おっと、今は幼稚園生だった。

幼稚園生は無邪気で良い。この頃が一番楽だ。先生の言う事を聞いているだけでいいんだから。小学生、中学生になると、何もやっていないのに連帯責任とか言つて怒られるのはめんどくさい。

「みんな、よくできました！」

ピアノを弾いていた先生が拍手をする。それに釣られて子供達も拍手をする。子供と言うのは大人の真似をしたくなるのが普通だからな。

歌の時間が終わったら帰る用意だ。正直言うと、私はこの時間がとても憂鬱だ。普通は家に帰れてラッキー！と思うが、私の家庭では例外だ。それ以前にあれば家庭と言えるのかさえも怪しい。

「学ちゃん、さようなら」

「先生、さようなら」

学ちゃんと言うのは私の事で、今の名だ。そして、私の苗字は、浅野。

うちの父は教育者で、昨年に学校を立ち上げた。そして、私は父が苦手だ。

校門に行くと、お迎えの執事さんが待っていてくれる。いつものように、車に

乗って家へ帰る。私の座っている席の隣には誰も居ない。

家に帰ったらすぐに勉強だ。そうしないと怒られるというか、洗脳？というか何というか分からないが、正直勉強しなくても点は取れる。数年前まで現役高校生だったからな！なめんじやねえぞ！と言う感じ。もちろん、用意された問題集はやる。それも、本を読みながらだ。

「やっぱり、この人の本は面白いなー」

問題集は小学三年生のだからゲームをしなくてもできる。だが、この家にはゲーム機という物が存在しないのだ。あるのは本と勉強の問題集とかぐらい。どうなってるんだこの家はと最初は思ったさ。だが、本だったら何冊でも買ってくれるからそれで本音は奥にしまっている。その所為で、私の部屋には本だらけだ。

「よーし、算数終わり！」

というか、六歳の幼稚園児が小三の問題集をやる事態変わってるよ。

勉強が終わったらする事は二つの選択肢に別れる。一つは本を読む。もう一つは絵を描く事。絵を描く道具は自分で買っている。お金は自己管理だからな。小六ぐらいになったら音楽プレーヤーを買ってもいいかと検討している。

どちらにしようか悩んだが、今日は絵を描こう。

「今日は、誰を描こうかなー？」

前は、磯貝君を描いた。彼はマジでイケメンだ。「イケメンだー」と言う台詞は一度、みんなと言ってみたい台詞ランキング五位に入る。

「よし、カルマ君を描こう」

カルマは、素行不良だけど頭は良い。よくあるキャラだけどそれが良い！私の好きなキャラランキング一、二位を行ったり来たりとしている。ぜひ会いたい！だが、それは叶わない事だ。だって、私は、浅野学だ。うちの家には双子もいなければ、弟や兄も居ない。つまり、私が「浅野学秀」の代わりだから。彼の代わりと言う事は、本校舎で頂点に立っていないといけないんだ。そうしないと彼らが成長しないから。私は、暗殺教室のファンとして、原作を守る。それは自分の役割を知った時に決めた事だ。

「おっと、もう七時だ。席に着いとかないと」

私は、赤鉛筆をそっと置き、部屋を飛び出した。



## 第二話 お母さん

いつの間にか小学三年生になっていた。幼稚園生の時に小三の問題集をやっていたのが昨日のようだ。

学校の話をするのもいいが、学校では授業、本を読む、授業、本を読むの繰り返しだ。友達というのを作るのがめんどくさいというのもあるが、家に帰ったらすぐに勉強をしないといけないので、放課後は遊べないのだ。だからと言って悲しいという訳でもない。むしろ最近の家が天国だ。いや、正確に言えば自分の部屋だ。

お金は自己管理、と言う事は欲しい物は何でも買っていいのだ。私が最初に買ったものはパソコンだ。もちろん、デスクトップだ。そして、二つ目に買ったものは小型冷蔵庫だ。ここには飲み物を入れる。リビングに下りた時、たまに父が居る事がある。私は父と顔を会わせたくないのだ。その為、下に行く回数を減らすために冷蔵庫、そして電気ケトルもあれば完璧だ。最後にこれはパソコンの次に重要な物だ。それは、テレビだ。私はアニメが大好きだ。だが、二年前まではテレビは下にしか無く、それにアニメを録画してはいけない。テレビが示す番組はいつもニュースだけだ。

「流石にニュースばかりは無理だわ。死ぬ」

そう思った私は、すぐにテレビを買おうと決めた。だが、ここで色んな問題が出てくる。もし、父が私の部屋に入ってきたら？そこで録画一覧を見たらどうする？答えは没収だ。それは何としても阻止しなくてはならない。そこで私はある作戦を思いついた。まず、大量のDVDを購入。私が見ているのは深夜アニメだ。学校が終わったらすぐに帰宅し、アニメをDVDにダビングするのだ。父が家を出るのは私とほぼ同じ時刻。帰ってくるのは九時過ぎだ。DVDにダビングしたらすぐにアニメを消す。これでは済む。

ん？ダビングしたDVDはどこに隠すのかって、それは私の洋服タンスの中だ。ニュース以外の番組を見る事にうるさいのは父だけだ。父が絶対に見れない場所に置いておけば万事解決という訳だ。

「我ながら良い作戦だと自負しているよ。さてと、早速新アニメを見ようかな」

アニメを見れる時間は父が帰ってくるまで。この時間を有効に使わなくては。

それにしても、このアニメの色遣いは良いな。異世界を舞台にしたストーリーだが、キャラの設定と共に悪くない……このアニメはこれからも見続けよう。

そんな調子でアニメを見ていると夕飯の時間になった。私はアニメを見るのを止め、下へ下りた。

この時間帯は父は居ないのでとても気分が良い。朝食を食べているだけで胃が痛くなってくるのだ。

リビングに行くのと、いつもは仕事が忙しくて一緒にいる時間が少ない母が居た。

「お母さん、帰ってんだ」

「言うのが遅れてごめんね」

母は父とは違い、親しみやすい。どうしたらこの二人が結婚したのか謎だ。幼い頃に母に聞いた話では高校で出会ったらしい。

「お父さんとは上手くいってる？」

「ぜんぜん」

「そっか、ごめんね。私が長く家に居られないから」

「そ、そんなこと無いよ!」

母は本当に優しい。会うたびに『ごめんね』と言ってくる。母が長く家を空けてしまいうのも仕方が無い。母は海外の会社のデザイナーをしていて、ほとんどは海外だ。それは私が幼稚園に入学してからだ。

ずっと一人だった私の事を思ってたか、よく手紙と服が送られてくる。勉強ばつかで女の子らしい事ができていないんじゃないかと思つた母の配慮だ。まあ、前世も言うほどお洒落はしていなかったが……。

「学は優しいね。私もできるだけ一緒にいれるようにするよ」  
「うん、ありがとうお母さん」

この瞬間が何よりも嬉しいんだ。

### 第三話 ノア

小学五年生にして海外旅行です。

一昨日、珍しく父から話しかけられたと思えば、海外旅行に行くとの事。これも勉強の為だと父は言った。場所はイタリアだ。

「学、見てみて！ピサの斜塔、本当に傾いているよ！」

私じゃなくて母が興奮しているのは何故だろう。

「お母さんなら海外飛び回ってるでしょ？」

「それは仕事。ちやんと観光した事無かったのよねー」

そう言うとう首からかけているカメラで何度も写真を撮る。

私は海外は好きではない。元々英語は苦手な方だったからだ。高校生の時、五教科で一番苦手だったのは英語だった。中学の時には赤点を取ったという記憶もある。それほど苦手で嫌いだったのだ。今は読み書きできるが、前世で苦手意識があつた所為か外国人と会うとビクツと体が震える。もし、英語で道を聞かれたら私は焦るだろう。

「いいや、近くのベンチに座つとこ」

私はすぐそのベンチに座った。

ポケットから音楽プレイヤーを取り出し、イヤホンを耳に当てる。移動中に聞いていた曲が流れ出す。

私は悲しい曲が好きだ。例えば、恋愛曲だったら失恋をテーマにした曲を選ぶ。と言っても、この音楽プレイヤーに入っている曲は全てアニソンだ。今は銀髪のパの駄目男が主人公のアニメの曲を聞いている。

このアニメの八割はコメディだ。あとの二割はシリアスだ。笑いがある時はとても面白い。だが、シリアスの時は本当に泣けてくる。前世でも気に入っていたアニメだが、ここでは時間の進みが違うらしく、今はこの物語の舞台、江戸の町、歌舞伎町の四天王が戦う話だ。あの話はとても良い。最後のシーンは本当に泣けた。

とてもいい気分です曲を聞いていると後ろからトントンと肩を叩かれた。イヤホンを外して後ろを振り向くと男の子が立っていた。

「何しているの?」

「曲を聞いているけど……」

見た目は私より年上だろう。見知らぬ私に話しかけるとはよほどの物好きか、それとも……。

「うちの家は貧乏でお金なんてありませんよ」

嘘だけだ。むしろ反対、お金持ちです。

男の子はぼかーんとしていたが、いきなり笑いだした。

「いや、ごめんね。別に誘拐しようなんて考えていないよ。ただ気になっただけ」

「そうですか。すいません」

「いやいいよと笑顔で返してくれた。でも、その笑顔は嘘臭くて、なんだか悲しくなつた。」

「君、名前は何ていうの？」

「相手に名前を尋ねる時は相手から訊ねるのが常識じゃないの？」

「ははっは！また一本取られたな。僕の名前は、ルーク」

ルークと言う事は外国人か。まあ、見た目で中性な顔立ちをしているし。かつこいとか、イケメンとかの分類に入るんだろう。

「私は浅野学。ルークさんも観光？」

「んーまあ、そんな所かな」

「日本語、上手なんですね」

最初から彼は日本語で喋っていた。外国人にしては異和感が無い日本語だった。

「仕事上で必要でさ。そういう君は観光客にしては暇そうだね」

「父に強制でここに来まして、母が喜んでくれているならそれでいいです」

「君は優しいね」

母にも言われた。そんなに私は優しいのだろうか？前世では何一つ親孝行ができなかった私が。

高校生になってからはよく母と喧嘩してばっかりだった。今思えば手伝いとか、お礼とかいっぱいしとけばよかったなと思う。

「そんな事ないですよ。うちは家族としては成り立っていないし、父とは喋らない日の方が多い」

「そうかい……。でも、君はよく見ているんだね。家族の事を」

「まあ。母は私の事を大切に思ってくれてますし」

実物のピサの斜塔を見て興奮している母に目をやる。あんな家で私が精神を保っていられるのは母のお陰だろう。仕事が忙しいと言うのに、一週間に一回は手紙を送ってくれる。服も送ってくれる。それなのに、私自身は何もしてあげられないんだ。

「誰かに見てもらえるだけでとても幸せな事じゃないのかな」

幸せ……私は、心のどこかで思っていたのかもしれない。父の事があまり好きではないけれど、見て欲しいと思っていたのだとしたら？それはそれで嫌な気持ちでは無い。だって、私の事を娘だと言ってくれた記憶が無い。私と父の関係は、教師と生徒だからだ。

ルークさんはじゃあねと言って立ち去ろうとする。後姿を見ていると、彼がさつき



言つた言葉の意味が分かつたような気がした。

「ルークさん、貴方を見てくれる人が居ます！私は貴方を見ています。縁があつたらまた会いましょ」

「君は本当に面白いなあ。そんな君に本当の事を教えよう。ルークというのは偽名さ。本名は“ノア”って言うんだ。それじゃあね」

まさか、偽名を使っているとは思わなかつた。でも、時折彼が見せる悲しそうな顔は気の所為だろうか。

## 第四話 赤髪の少年

今日は、新刊の発売日だ。私が好きな作家が二年ぶりに新作出す！と、昨日にニュースでやっていた為、隣町まで着ていた。

柵ヶ丘には、もちろんの事、本屋もある。だが、二年ぶりの新作というニュースを見たファン達が朝から並び、買っていたのだろう。学校帰りに寄って見たら商品棚はすっからかんだ。明日に入荷すると言われても無理だ。今すぐに読みたいのだ。だからわざわざ隣町まで行くのだ。

「書店は、ここかな？」

携帯のマップ通りに来ると、書店を見つけた。かなり大きな書店だ。こういう所は在庫を多く仕入れている。人気作家の新作となればあるだろう。

商品棚の前まで来ると、そこには真ん中に一冊だけぽつんと残っている本があった。間違い無い、これが新作だ！

私は本を手にとると、カウンターまで行き、ほくほくとした気分でお金を支払い、店を出た。

腕時計を見ると、時計の針は丁度三時を指していた。おやつの時間か。そこら辺の店

で何かを食べてから帰ろうと思った。

目的の店まで地図とにらめっこしながら歩いていると、ボキ、ゴキという音が聞こえてきた。音の大きさにかなり近くだろ。

最初は怖かったが、少し興味もあった。

人目が見つからないこの路地だろう。私は、少し顔を出して、覗き込むように見た。そこには赤髪の少年と体の大きな男が数人居た。男達が赤髪の少年を虐めているのかと思っただが、そうではなかった。一瞬の出来事だった。少年が男達の不意を衝き、男を殴った。彼の小さな体はこの細い路地と相性が良いらしく、男達の間をスルッと抜け、男の急所に攻撃し、彼らは倒れた。

「凄い……」

ただそう思った。

「何が凄いの？」

聞かれていたとは思わず、縮こまる。男達のように暴力を振られるのだろうと思っただ。だが、衝撃は来なく、ゆっくり目を開くと、彼はズボンのポケットに手を突っ込み、バック型の飲み物を飲んでた。

「暴力は振らないよ。アイツらが勝手に吹っかけてきただけだから」

「売り言葉に買い言葉って奴？でも、喧嘩って危なくない？怪我したら痛くない？」

「質問ばかりだね。全然、俺強いもん」

彼は輝いていた。自分の事を一番と信じているその目が。だが、その自信は無謀だ。その内壁にぶつかるだろう。

私は痛い事、辛い事は嫌だ。そう思っている人の方が多いと思う。痛い事、辛い事と言うのは一番の現実だと思う。私は現実から逃げている。喧嘩なんて一生しないし、できない。怪我したら泣いてしまう。痛いから。私を感じた痛みとは比べ物にならないくらい痛い思いをした人は大勢居るだろう。でも、私はこけただけで泣いてしまう、辛い事……勉強から逃げてしまう。そんな自分が嫌だ。だから、彼みたいになりたいと思つた。『自分は強いから』そう言ってみたいと思つた。

「私の名前は、浅野学。どうやったら貴方みたいに強くなれるの……？」

「初対面でそれ聞く？」

「私は聞きたいと思つた。喧嘩じゃなくて、内面で。どうしたら簡単に折れない心が持てるの？」

「さあ、人それぞれじゃないかな。十人十色つて言うでしょ？それと同じ。弱い人も居れば強い人も居る。そうしないとみんな同じで偏つちゃうんじゃない？」

そうとは考えた事は無かつた。

父は、いつも私に言う。『強者であり続けなさい』と。強者になつて何が得られると

言うのだ。下僕か？財産か？そんなのどうでもいいだろう。

私は「弱い者になりたい」弱者だからこそ強者から見えないものが見える。弱者だからこそ強者には得られないものが得られる。

「強くなくていいじゃん。弱かったら弱かったらでさ」

それだけ言い残すと彼は行ってしまった。

三年後の彼からでは信じられない発言だ。だけど、少し元気を貰った。私は逃げているんじゃない。立ち向かっているんだ。強者では無く、弱者になりたいと抗っているんだ。それがいつか父に認められるようになるまで。

「ありがとう。『赤羽業君』」

## 第五話 蓮

とうとうやってきた柵ヶ丘中学校入学式。

体育館で長々と校長の話を聞いた後、新入生代表挨拶が行われた。代表は誰かと？そんなの聞くまでもないだろう……私だ。

座っていたパイプ椅子から立ち上がり、直角に曲がり、マイクの前に立ち、喋る。長い文を読み終えると、一礼して席に戻った。そして、最後に理事長の挨拶だ。彼の言う事は全て綺麗事だ。これから始まる洗脳教育は絶対に受けたくないな。

「新入生は、児童玄関前に張られたクラスを見て、自分のクラスに移動してください」私のクラスは、A組だ。

この柵ヶ丘中学校には成績の良い方からA、B、C、Dと並ぶ。一、二年生はD組までだが、三年生にはもう一つクラスがある。それが、E組。通称、エンドのE組。成績が悪化した生徒、校則違反者は特別強化クラスに入る事となるが、それは名ばかりだ。その実態は「差別」。一部の生徒を差別する事で、E組のようにはなりたくない、優越感と緊張感を持たせ、学業に効率化させるのが狙いだ。

私の正直な気持ちを言うと、差別をする奴らは馬鹿だと思う。そいつらの方が頭悪い

んじゃないの？って言いたくなる。それに、どれだけ成績が良かったって、それじゃあ人間性疑うよねって話。

そんな事を思いながら教室に入ると、ダサイ髪型をした男がやってきた。

「君が浅野学さんだね。僕の名前は、榊原蓮と言う」

「あつ、そう」

彼の自己紹介に私は素っ気なく答え、席に座った。

榊原蓮、彼のようなタイプは嫌いだ。あつ、前原君は別に嫌いでは無いよ。バレンタインの話は良かったね。さりげなく告白してるよね。キyunキyunするよね！

「理事長の一人娘かー小さい頃から教育を受けているんだろ？羨ましいよ」

理事長の一人娘。そう聞いて私は腹が立った。とても、とても。彼を睨んでいた。その言葉を取り消せと。

「す、すまない。そう呼ばれるのは好きではないんだ」

「そ、そうかい。それはすまなかった」

自分が何をしているか気付き、彼に謝った。

あんな肩書きは嫌いだ。

担任は簡単にこれからの事を話して終わった。この学校は授業第一だ。友達紹介は

授業内ではやらないんだろう。まあ、最近の中学生はコミニケーション能力が高い。一ヶ月も経てば仲良しになっている事だろう。

私は、鞆を肩にかけ、教室を出ようとすると、榊原がまた話しかけてきた。腹立つ。この男、回し蹴りをしてやるか。

「君の事を何と呼べばいいかな？」

「何でもいい」

「じゃあ、学さんと呼ぶよ。僕の事は気軽に蓮と読んでくれ」

「はいはい」

全く相手にしていないが、彼は色んな事を喋り出す。そろそろ一人になって本を読みたい。丁度いい所なんだ。主人公が犯人を暴くシーン。読みながら犯人を探していたが、本当に合っているのか確かめたいのにこいつは……。

「私、こつちだから」

早歩きで榊原から離れる。

「学さん、また明日！」

大きな声で言う榊原。

「……ああ、また明日。蓮」

私は彼の名を呼ぶと、手を挙げ、振り返した。



## 第六話 オタクの法則

一学期も終盤だ。そんな時期にやってくる学校のイベントと言えば、期末テストだ。もちろん、学年一位は取る。そうしないと父に何か言われるからだ。

いや、そんな事を言っている場合では無い！今日は、私が今ハマりにハマっているアニメのCDが出る日なのだ。これだけはどうしても譲れない。仕方が無い……変装して行くか！

「だ、大丈夫だって。髪型はツインにして、マスクもしたし、地味めの服も選んだからさ！」

いつもは三つ編みにして、片方の肩に寄せているし、誰もツインをしている浅野学なんて分からないだろう！

行きつけのCDショップに入る。あのアニメのOPはとても良い。まず、テンションが上がる。あれで教科の専門用語をあてはめて、替え歌を作れば一位なんてちよちよいのちよいだぜ。どちらかと言えば、こっちの方が効率も良いし、何よりも勉強のモチベーションが上がる。

アニメのコーナーに早歩きで向かい、ライトノベルを読むような勢いでCDを探す。よし、見つけた！新作はだいたいすぐに目に入る場所に置いてあるからな。あとはお会計さえすれば私の勝ちだ。

すぐにお会計を済ませ、店を出ようとした時、肩をトントンと叩かれた。もしかして、ばれたか、ばれたのか！と思いつながら後ろを振り返ると、眼鏡をかけた男子が手に持っていた手帳を私の方に向けていた。

「落しましたよ。ん？『浅野学』って……」

学生手帳落としていた！まさか、学生手帳を何故……はっ！そう言えば、出かける前にハンカチの下に置いてあったはずだから、一緒に鞆の中に入って、サイフを鞆の中に戻そうとした時、落ちたんだ！

店から離れたカフェで。

「まさか、あの浅野さんがアニメ好きだとは思わなかったな」

「うん。父があんなんだからさ。アニメとか隠れて見ていたからね……」

ばれた相手はまさかのまさかの竹林孝太郎君だった。彼はE組でも頭は良いが、実はオタクという隠れ個性を持っている。彼のキャラは嫌いでは無い。むしろ話が合うのではないかと思っていた。だが、こんな出会いはあるか？いや、最悪だ。

「君も、そのアニメ好きなのかい？」

「えっ、ま、まあね。DVDにダビングしてあるから一週間に三、四回のペースで見なおしてるよ」

「僕もだ。そのアニメはとても良い。まず、イラストの繊細さだ」

「そ、それ！私も分かるよ！キャラの表情はとても細かい所まで描かれていてさ、キャラもそうだけど、魔法アニメだからさ、魔法の詠唱シーンあれはとても綺麗だよね！」

「同感だ。その詠唱シーンを表現豊かに声にして表す声優の力量もだ」

彼の言う意見にとっても共感し、そしてそのアニメも含め、他のアニメについても二時間ぐらい語り合った。時計を見ればもう六時過ぎだ。好きな物には熱中してしまう。これがオタクの法則ではないかと思う。

「あのさ、電話番号交換しようよ！またアニメの事について語ろうよ」

「そうだね。こういう人、周りにはいなくて少し心苦しかった」

竹林君の言う通りだ。うちの学校は勉強ばかり。趣味の事について話す人なんていない。それも、アニメとなれば二次元の話につながるから現実、つまり勉強から離れていると言われ、冷たい目で見られるだろう。彼もその事を理解し、言いだせなかった。私もA組という立場からそんな事を知られればまずいと思っていた。

「それに、浅野さんは噂で聞くような人ではなかった。むしろ、こっちの君の方が合っ

いるんじゃないか？」

「うん。でもさ、私は否定したい。父の教育法を……だから壊すんだ。その為にはさ、時間が必要なんだ。そして、それは私だけじゃできない。E組の生徒が必要なんだ」

「E組の？」

E組の生徒は差別の対象となり、絶望になっている。そんな生徒が成績トップを独占したら父の教育法が崩れる。本校舎の生徒も簡単に言いだせなくなる。それが起るのは二年後。そして、月が三日月になる事、一人の女性がある怪物を助けるために命を落とす事、ある少女が姉の仇を討つためにポロ校舎に潜入する事、そして、私がE組の壁になる事が条件だ。

「E組の人には申し訳ないと思っている。でも、私は差別を無くしたい。そして、私は弱者になりたいから」

「……」

竹林君は私の話を黙って相槌を打ちながら聞いてくれた。

丁度夕日が綺麗だ。

「長々と話しちゃったね。じゃあ、バイバイ」

それだけ言うと、私は沈んでいく夕陽の方へと歩いて行った。

## 第七話　メイドカフェ

中学校初めての夏休みがやって来た。

私は部活には入っていない為、学校に行く事は無いのだが、生徒会なので、地域のイベントに出るとか何とかでクソめんどくさい。夏休みは溜まったアニメを消費するという大切な用事があるというのに……。

「はあ」

「どうしたんだい？学さん」

ああ、そういえば蓮（いん）も生徒会だった。

「いいや、何でも無いよ」

父に言われ、生徒会に入った私。役割は会計だ。蓮は書記、瀬尾とかいう奴も入っている。二年後の五英傑メンバーの私含め、三人が所属している訳だ。

今の生徒会会長は、三年A組の木原美佐子。成績優秀で人望も厚いらしい。クラスからの推薦もあって生徒会長に立候補したとか。優しい事で有名だが、所詮、E組の事を馬鹿にしている女だ。どうでもいい。

生徒会副会長は、二年A組の笹本幸助。成績はいつも上位だ。眼鏡をかけている。ど

こかで見た事ある気がするが、気の所為だろう。

「浅野さん、意見あるかしら?」

「はい。今年度に入って、野球部、テニス部、サッカー部、バレー部、バスケット部の部員が増えた事によりボールの数に限度があるとの事です」

「ボールだったら修理すればいいんじゃないの?」

「それが、ボールに穴が開いて空気が入らないと。それと、空気入れをもう一台増やしてほしいとの要望が多いです」

「ボールはしようがないわね。空気入れは……無理ね。一学期の予算ではきついわ」  
「分かりました。そのように伝えておきます」

と、このように夏休みに来ては会議をする。本当にめんどくさい。早く帰りたいと言  
うのに、終われば一年二人が話しかけてくるからうざい。私の自由は無いものか……。

「竹林君からメールだ」

内容は、新しいメイドカフェができたらしい。今度一緒に行ってみないか?と。返事  
はもちろんOKだ。

気分が良くなって鼻歌を歌っていた。メイドカフェは三次元だ。だが、メイドカフェ  
には二次元が好きな客が来たり、メイドさんが二次元の事が好きという事が多くあり、  
情報交換ができるのだ。仲間が増える事は良い事だ。

そして、メイドカフェに行く日がやって来た。

変装もばっちりだ。マスクに伊達眼鏡まで装備した。

竹林君と待ち合わせをし、メイドカフェの前まで来た。心の準備はばっちりだ。

ドアを開けると、カランカランとドアに付いていたベルが鳴った。すると、メイドさんが一礼お辞儀した。

「お帰りなさいませーご主人様、お嬢様」

メイドカフェは、男性が行くイメージが多いが、女性も行く。女性が入店すると、メイドさんは「お嬢様」と言ってくれる。

このメイドカフェは本格的だ。だいたいのメイドカフェは、現代に合わせたふわふわした感じの内装だが、ここは本家を忘れることなく、中世をイメージし、そして、メイド服がロングになっている事だ！

お出迎えされたメイドさんに案内される。

「ご注文が決まったらこちらのベルを鳴らして下さいませ」

「はい」

メイドさんは、にっこりと笑った。笑顔はよく、○円スマイルと言われるが、あの笑顔は良かった。

「ここはいいね。いつものメイドカフェとは別の雰囲気で落ち着くよ」

「ああ。メイドの好みは三種類あるからな。一つは、現代のメイドだ。メイド服のスカート部分は短くカットされ、露出部分も増えている。二つ目はここのような中世を忘れない本家のメイドだ。最後に三つ目はどちらとも。俺はどれかと言われれば、現代のメイドだ。だが、二つ目も捨てがたい」

「確かに、イラストで表現するなら現代のメイド服だ。だが、二つ目のメイドはお姉様というイメージが出てまた良い！どれかにしろと言われたら二つ目だな」

「私達は真剣にメイドについて語っていたが、簡単に言えばただの馬鹿だ。だが、これがいいのだ。こういう話をして盛り上がりたいのに……」

そろそろ注文をしようとメニュー表を見る。特にお腹は空いていない為、珈琲でも頼もうか。いや、ここは紅茶にしよう。

「浅野さんは何にするんだい？」

「私は紅茶を」

「奇遇だ。僕も紅茶だ」

同じものを頼むとは思わず、クスツと笑う。

ベルを鳴らすと、メイドさんがやって来た。

「紅茶を二つ」



「かしこまりました」

注文をしてから四分ほどたった頃、メイドさんが銀色のトレイに紅茶を乗せて戻つて来た。

「どうぞで」

「ありがとうございます」

お嬢様気分でお礼を言う。こういう気分が味わえるのがメイドカフェの魅力でもあるのではないかと思う。

最初は、香りを楽しむ。その後、紅茶に砂糖も何も入れず、一口飲む。甘みがある。

「ミルク貰えますか？」

「はい。分かりました」

しばらくすると、ミルクを持ってきてくれた。

ミルクを紅茶に入れ、かき混ぜて飲む。うん。ストレートも良いけど、ミルクとはやっぱり合うね。

「お嬢様、その紅茶がアッサムだとおわかりで？」

「はい。香りだけでは分からなかったので、飲んでみたら甘く、濃厚だったのでアッサムかなと思って」

母が海外から帰って来ては紅茶をお土産にしてくる。その所為か紅茶には少し詳し

なくなった。そんな知識がここで役立つとは……。

「ストリートも良いと言われるけど、私はやっぱりミルクを入れた方が良いので」

「そうですか。私もミルクを入れる方が好きなんです。アツサムもいいですが、私が好きなのはアールグレイですね」

「ああ。アールグレイは、少しくせがある香りですよ。私は少し苦手なんですよ」

母は好きと言っていたが、私はどうも苦手だ。飲めない事は無いが、くせのある香りに抵抗があるんだよね。

「香りが苦手な方が多いですね。そう言う時は、ミルクを入れたり、アイスティーにするといいですよ。私はミルク派です。たまにアイスティーにして楽しめます」

「なるほど……今度そうしてみようかな。ありがとうございます」

「いえ。大したことではありません」

それから一時間、竹林君と最近話しあえなかったアニメの事について話あった。

そろそろ帰ろうと席を立ちあがった時、さっきの紅茶に詳しいメイドさんがやって来た。

「お嬢様、こちらを」

メイドさんに渡されたのはメモだった。たまたまれたメモを広げると、紅茶のレシピが書かれていた。

「ありがとうございます！これで紅茶を淹れてみます」  
「はい」

またカランカランと音を立ててドアをくぐった。

「ご主人様、お嬢様、いってらっしゃいませ」

“行つてきます” そんな感じでまた歩き出した。

## 第八話 体育祭と学園祭

体育祭の時期がやって来た。柵ヶ丘中学校では九月終盤にやる事になっている。

「お嬢様の学校では体育祭ですか」

「はい。ウチの学校は生徒会が種目を決めるんでめんどくさいんですよ」

夏休みに来たメイドカフェはあれから通うようになっていた。

この店はメイドカフェというより、メイドが居るただの喫茶店みたいなものだ。その所為か普通の客も多い。

初めて来た時に紅茶の事で話したメイドさん、森さんというのだが、かなり仲良くなった。電話番号も交換し、紅茶の事以外にも色んな事を話す良い相談相手になっている。

「マスター、いつものケーキ」

「はい」

このケーキはとても美味しい。ケーキ屋にも負けないぐらいの美味しさだ。そして、この紅茶とが一番相性がいいのだ。

数分するとカウンターにケーキが置かれる。いつも頼んでいるのはチョコケーキだ。

フオークで一口サイズに分け、口に運ぶ。

「やっぱりここのケーキは美味しいですね」

「ありがとうございます」

マスターは無口だが、料理はとても美味しい！この店に人が来る理由の一つでもある。そして、もう一つはここのメイドが綺麗だと言う事だね。

森さんとお喋りをし、紅茶も何杯か飲んだ後、お会計をし、店を出た。

「さーてと、家に帰るか」

体育祭当日。

主な種目は走る事だ。五〇メートル走、一〇〇メートル走やクラス対抗リレー対決だ。

運動に関しても成績の内に入る為、A組とB組に戦力が偏ってしまうのだが、それは仕方が無い事だ。

「位置について、よーい……」

パンと銃声が鳴ったのと同時に走り出す。

私の今の順位は二位か。スタートダッシュを失敗したからな。先頭を走るのは、陸上

部の子だ。

部活はしていない。だが、こっちは習い事で色々やらされてきたから体育の成績は良い方だ！

一〇〇メートル走で勝負をつけるとしたら、半分を越えた所だ。ゴールが近付くと少し気を抜く事がある。そこを突く！私は、考えていた通りに半分以上を越えた所でスピードを上げる。そして、ゴール手前でギリギリで抜き、一位でゴールした。

「私さ、最後まで手加減しない派なんで」

主にゲームで。

ほら、HPがあと少しで削れるという所で相手が回復してくるパターンがあるから、ここはあえて強い技を選択するみたいなのそんな感じ。

放送部が順位の発表をしている。今、マイクを持っている人は荒木っていう人だ。二年後の五英傑の一人。私、あの人苦手だわ。思ったら、五英傑ってマシな性格の奴一人もないんじゃないの？いや、気にしないでおう。

それからも体育祭は続いた。そして、全ての種目が終わり、成績発表がされた。一年優勝はA組。二、三年生もA組が優勝だった。こんな感じで体育祭は幕を閉じた。

気が付けばもう十一月、今度は学園祭だ。

櫛ヶ丘の学園祭は、ガチの商売合戦で有名だ。収益の順位は校内に張り出される。ここでトップを取れば、実業的な実績として就活でアピールができるのだ。

もちろん、うちも何を出し物にするかクラスで意見を出し合っていた。

「カフェでいこう。他の店もそんな感じだと思うが、うちのクラスは食べ物はもちろん、内装にもこだわろう！」

「おおー！」

正直、学園祭とかどうでもいい。むしろめんどくさい。というか休日を削つてのイベントとかマジぶざげんなど言いたい所だけど、ちゃんとしないと父に何と言われるか分からないからな。

それから準備期間に入った。みんなは優勝する為に一生懸命やっていた。もちろん、私もやった。めんどくさいと思いつながら。

「二年A組、カフェやっていまーす！落ち着いた部屋で美味しい紅茶はどうですかー」  
売り子には色んな所で呼びこみをしてくれと頼んである。私は美味しい紅茶を入れるだけだ。

「お待たせしました」

紅茶とクッキーを運ぶ。クッキーは紅茶に合うものを作った。これも森さんとマス

ターのお陰だ。今度お札に作って持って行こう。

うちのクラスは主に、紅茶と茶菓子で勝負だ。

ここは内装が落ち着いている。外の騒がしい空気が苦手な人や疲れた人が静かな場所を求めてくるという心算だ。

「そろそろかな」

私は、この時の為に音楽室から運んできてあったピアノの鍵盤蓋を開ける。椅子に座り、深呼吸をしてから鍵盤に指を置く。鍵盤を一つ一つをなぞるように弾いていく。心が静まる曲、幻想的な曲を何曲か弾いた。そして、全ての曲が引き終わると、拍手が起こった。

ピアノを弾く時、わざと廊下側の窓を一つ開けていた。

それから人が次々に来店してきた。さっきのピアノが綺麗だったと言う感想付だ。

二日に渡って行われた学園祭も終わり、そして、収益の順位が張り出された。やっぱり上級生には負けちゃうか。一年A組は七位だった。他のクラスの出し物とは違い、意外性があるとの事で多くの人が来店してきたからだ。

こうして、大きな行事も全て終わり、後は期末テストを残すだけとなった。



## 第九話 下の名前

期末テストは予定通りの学年一位だ。英語でミスしたが、仕方が無い。元々苦手な教科だ。前世では赤点を取るぐらいだった。今に比べたら五十点取つたらとても嬉しいくらいだ。

今日は生徒会の仕事があつた為、放課後、残つていた。

「よし、これを明日会長に渡せばいいか」

戸締りをし、鍵を職員室へ戻した後だった。上の階から音が聞こえた。気になって音が聞こえる場所まで来てしまった。

静かに歩き、そつと部屋の中を覗くと、水色の髪の少年が楽器を吹いていた。見た所一人のようだ。覗くだけのはずが教室の中まで入つてしまい、振り返られた。

「もしかして、浅野学さん？」

「私の事、知っているんだね。潮田渚君」

「どうして僕の名前を……」

「全校生徒の名前は一応把握しているんだ」

嘘だ。ほとんどの生徒の名前は知らないし、興味が無い。潮田渚はこの物語のメイ

ンキャラクターであり、この子中心に話は進められていく。

彼が手に持っていたのは、トロポーンだった。そういえば、渚君はE組に入る前までは吹奏楽部だったわけ。最近、記憶がはつきりとしなくなってきた。

「君、一人でやってたの？」

「ま、まあね。僕さ、勉強も部活も全く駄目でさ……浅野さんが羨ましいよ」

「そう？ 私は潮田君の方が羨ましいよ」

「えっ？」

本当に羨ましい。私は子供の頃から部屋に籠って勉強だのドリルだのして、ゲームをやる事も友達を作る事も許されなかつたのだから。

「君が良いならだけどさ、勉強教えようか？」

「良いの!？」

「うん。週一ぐらいになりそうだけど」

「むしろこつちからお願いたいくらいだよ！お願いますす！」

深く頭を下げた渚君に失礼だったが、笑ってしまった。

私は、鞆から携帯を取り出す。画面の真ん中に表示された時計を見ると、まだ五時だった。門限は七時だ。下校までは後三十分ある。

「勉強もそうだけど、トロポーンの吹き方教えようか」

「浅野さん、トロボーン吹けるの?」

「だいたいの楽器は」

それから下校までの三十分、私はできる限りの事を教えた。

五分前には戸締りをし、校門を出た。

「今日はありがとう!とても助かったよ」

「お礼を言われるような事はしてないよ。でも、あの短時間であそこまで吹けるようになるのは凄いよ」

「そうかな……」

実際、結構吹けていた。彼は家庭の事もあって苦しい思いをしているのかもしれない。そんな状況もあり、勉強も満足できていないんじゃないかと私は思っている。

「浅野さんって、噂とかで聞いているよりもとても良い人だなんて思ったよ。ほら、A組の人達はE組の事とか……」

渚君の言う事はとても分かる。A組は学年の中でのかなりの学力を持つ者達の集団だ。E組に対する差別はA組が言った事に乗っかってやることが多い。

「私はさ、あのシステムが嫌いだ」

「でも、浅野さんって理事長の……」

「確かにそうだ。でも、私はあの人が嫌いだし、あの人のやり方も気に入らない。だから

壊す。あの人の教育法を……その為にはA組としてトップに立ってE組の壁にならない  
きやいけないんだ」

「E組の壁に？」

「父の教育法は、弱者が強者に勝つ事で壊れるものだ。私はその為にも強者のフリをし  
ないといけないから……」

竹林君に話した時と同じようにまた決意を固める。そうでもしないと私の心はすぐ  
に折れてしまいそうな気がするからだ。

クラスメイトや先生からは勉強も運動もできる奴だと思われている。でも、そんな私  
の心がもろいんだ。あんな家庭にいたら強くなるような気もするが、全くの逆だ。自  
分の気持ちが出せなくて、自分を追い込んでしまう。毎日色んな事にビビっている  
だ。

「ごめんね。真剣に話しこんじゃって……この事は内緒で」

「う、うん。とりあえず、電話番号交換しよっか」

電話の番号を交換し、渚君を登録した。

「私の名前を登録する時、下の名前にしてくれるかな？正直言うと、  
“浅野” っで好き  
じゃないんだ」

浅野って聞くだけであの浅野理事長の娘かと言われるのは散々だ。

「じゃあ、僕も。潮田は母の性でさ。いつ父方の名字に戻っても違和感が無いようにしたいんだ」

そういえばそんな事も語っていたような気がする。渚君は誰よりもお母さんとお父さんの事を考えているんだな。それがお母さんに伝わればいいのになと思う。

「それじゃあ渚君、またね」

「うん。また」

これでE組の面子に三人も関わってしまった。竹林君はともかく、渚君はまずい。赤羽は……まあ、大丈夫だろう。もう二年も前の事だ。

もう一年が終わる。あと一年で三年生……。

空を見上げると丸い月が空に浮かんでいた。この月が三日月になるのもあと少しか。

## 第十話 錆びたレール

二年生の秋。体育際も終わり、中間テストが近付いていた。

私は、二年になって少し忙しくなった。その所為で渚君の勉強を見れる時間が無くなってきていた。

私は悩んでいた。私が彼を手伝え、E組に行く事を阻止できる。だが、それは彼の為にはならない。彼はE組に行く事によって友達の話、勉強の話、家の事情の問題を解決できた。このままいけば彼はE組行きだろう。

下校前に買った水を一口飲んだ。

「何しているんですか？」

優しい声で話しかけられた。顔を上げると、目の前には女性が立っていた。確か、彼女の名は……。

「私の名前は、雪村あぐりって言います」

この物語で重要な役割を持つ人物。彼女が死ぬ事が分かっているのにそれは止められないと思うと心苦しい。

「貴女は、浅野学さんですよね？」

「はい、そうですけど……」

「やっぱり！学校でよく名前を聞くので、どんな人かなと気になっていたんです」

まあ、生徒会だし、理事長の娘っていう肩書きがあるし、先生からは注目の的だし。

「お隣いいですか？」

「どうぞ」

鞆をどけ、自分の隣を空けた。

雪村先生は、E組の教師をしている先生だ。廊下では色んな本や、資料を抱えては走っている姿をよく見る。つまり、生徒の為に出来る事をしてあげたいという気持ちが分かる。それなのに本校舎の教師と言えばクソばっかりだ。

「雪村先生は、E組の教師なんですよね」

「はい。でも、教師って難しいですね。私の教え方じゃあ全然駄目で……」

「教え方はどうでもいいんです。誰かの為に教えてあげたいという気持ちが大切なんです。それが本当の教師というものなんです」

本校舎の教師は、教科書に書かれた事を一時間ずつと喋っているだけだ。本当にそれだけ。それだけでなく、一部の生徒を蔑むなど言語道断。人間として最低だ。

「ふふっ。聞いてた感じとは違うんですね」

「よく言われます」

竹林君と渚君にも言われた事だ。

「雪村先生、もし、この先の出来事を知っていると云ったらどうしますか？」

「えっ!? えーっと、残念じゃないかな……」

残念? どういう事だろう。未来を知っていた方が得と考える人の方が多いと思うのに。

「だって、その先の事を知っていたら楽しみが減らないですか？」

楽しみか……。

雪村先生の言う事を分かりやすく言えば、地域ごとにアニメの放送時間は違う。自分の地域でやったアニメが他の地域では一話先にやっていたから気になって見るが、次の週にそのアニメがやった時、知っている内容だったからつまらなくなると言う事だ。

「確かにそうですね」

他にも色んな事を話した。勉強の事、中学生の妹の事。

「あつ、そろそろ時間! 柳沢さんに怒られちゃう! じゃあ、浅野さんまた!」

時計を見ると、慌てて鞆を持って走り去って行った。

そうか、もう秋なんだ。二人の分岐点が近くなってきた。

三日月になるまで、もう六カ月しかないのか……。

笑顔を見せながら色んな話をした雪村先生は居なくなってしまう。そう思うととて



も悲しい。何故、あんな優しい人が居なくなってしまうのだろうか。

物語は残酷だ。渚君や竹林君は物語通りに道を進んでいく。まるで、決められたレールの上を走っているかのようだ。そんな中、一人だけ脱線しているのがこの私だ。決められたレールから脱線した私は自分でレールを作りながら走らなくてはならない。その途中で錆びたレールを作り直す事はできないだろうか？

できる。私は自分の作ったレールを走っているのだから誰かの道を変える事はできるはずだ。

彼女の走る先に待つのは錆びてしまったレールだけ。そのレールを作り直すんだ。私の未来の楽しみと引き換えに誰かの命が救われるのならそれでいいじゃないか。

作戦決行は、三日月になる日。どうやって助けるか……それは、今日から考えよう。

## 第十一話 兄

気付けばもう一月だった。

渚君と竹林君はE組行きのお知らせを受けてしまったらしい。三月になればE組の校舎行きだと言う。

そういえば、前期生徒会長の笹本幸助が、赤羽に殴られて骨折になったらしい。これが赤羽がE組に行く事になった理由だ。

どこかで見た事があると思えば、笹本先輩、こんな重要な役割があるモブだったとは……驚いたなあ。

中学生になってから日記をつけるようになった。今日の分が書き終わり、ベットに入り、目を閉じた。

あれ？いつも鳴るはずの目覚まし時計が鳴らない。どういう事だろうと思い、起き上がろうとするが、起き上がれなかった。

目をゆっくり開けると、家の天井とは違い、白色の天井だった。  
ピーと音が聞こえる。

口元辺りに何かの感触がある。体が重い。頭すら動かさなかった。

ガラツとドアが開く音がする。私の部屋はスライドでは無いはずだが……。

「う、嘘！な、ナースコール！」

ナースコール？と言う事は病院か？でも何故病院に……。

しばらくすると、白衣を着た男性と一人の女性がやって来た。

「まさか……意識が回復したようです」

「先生、本当ですか!？」

「はい。あの状態で意識が回復するなど奇跡に等しいですが……」

「ありがとうございます……」

状態？回復？いったい何が……。

それに、「ありがとうございます」と言った声はどこかで聞いた事がある。懐かしい……とても。

またガラツとドアが開く音がした。

「海里が目を覚ましたのか!？」

「あなた！ええ」

か、いり？海里って、私の……私の前世の名前じゃないか。何で……じゃあここは元の世界なの？

眠たくなってきた。睡魔には逆らえず、私は目を閉じた。

視界がぼやけている。また病院の天井なのかと思えば、そこは私の部屋の天井だった。

今は何時だと思い、飛び起きる。

近くの時計を取り、見ると、時計の針は三時三十五分を指していた。窓を見るとまだ暗かった。日付も確認するが、日記をつけた次の日だ。四時間ぐらい経っていたみたいだ。

よく分からなかったが、考えると夜が明けてしまいそうでベットに潜り込んで目を閉じた。

今度は、どこかの草原に立っていた。

辺りを見渡すと、小さい女の子の姿が見えた。間違い無い。この子は中島海里だ。

私は、ある男の子に抱きついた。この男の子は私の兄、中島海人。私は、海にいと呼んでいた。

「海里は本当にお兄ちゃん大好きねえ」

「そうだな！」

ああ、思い出した。ここは家族でピクニックに行った場所だ。

海にいと裸足で走り廻ったんだ。楽しかったなあ。

「海にい、大好き！」

「俺も、海里の事、大好きだよ！」

少し年の離れた兄妹だったけど、私が泣いたらすぐに隣に来てくれた。

そんな優しい兄は、学校でいじめられていた。

正義感が強い兄は、将来、警察官になる！とずっと言っていた。その正義感からクラスでいじめられて一人になっている子に話しかけ、一緒に居るようになってからだ。いじめのターゲットを兄に変えたんだ。傷だらけで返って来た兄は、「ドジを踏んだ」と言って笑って誤魔化していた。何で気付かなかったんだらうって。

仲の良い友人は別のクラスで、迷惑をかけたくないと言い、何も話さず、家族にも、私にも相談せず、ずっと溜めこんでいた兄は、私が中学生の時に飛び降りて死んだ。

兄は、私と違い、勉強も運動もでき、部活では頼れる先輩と聞いていた。なのに、兄は、兄は！

葬式が終わった後も、笑う兄の写真が入れられた遺影を抱えて泣いている母の顔が忘

れられない。

今、雪村先生の妹……あかりちゃんもお姉さんが亡くなったらこうなるんだらうか……。だとしたら尚更止めなければならぬ。

私は新たな決意をして目が覚めた。

窓から差し込む光は、あまり明るくなかった。これから起る事を指しているかのよう……。

## 第十二話 復讐なんて

二月になり、どんどん時間は過ぎていく。私は焦っていた。

私は思い切って今日、雪村先生の妹、雪村あかりちゃんに会ってみることにした。

雪村先生があかりちゃんに私の事を話したらしく、すると、本人から会ってみたいとの事だった。丁度よかったので二つ返事で了解した。

待ち合わせ場所は、私が決めていいと言われたのであそこの店にした。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「へっ？あ、あの……」

この店にまさかメイドがいるとは知らずに来た人が慌てるのは普通だ。

困っているあかりちゃんを見つけ、接客をしているメイドさんに言う。

「清水さん、その子は私と待ち合わせをしていた子なんだ」

「そうでしたか。それでは」

清水さんが下がるとあかりちゃんは周りをきよろきよろしながら私の方へ来た。

「初めまして、浅野学って言います」

「あつ、どうも初めまして、雪村あかりです」

どうぞと言うと、あかりちゃんは席に着いた。

私はベルを鳴らし、注文をする。

「あかりちゃん、紅茶はいける?」

「は、はい」

「敬語じゃなくていいよ。同い年でしょ?」

「あつ、うん。分かったよ」

敬語を外した方が可愛いなあ。原作より表情が柔らかかだ。これが演技をしていないあかりちゃんか。

原作キャラとは結構接点持ち過ぎているよなあ……まあ、これは必要な事だし、しようがないか。

「あかりちゃんってテレビ出てるんだよね?」

「まあね。でも、今は休業中なんだ」

確か、『磨瀬榛名』って名前だったか。彼女の出ていたドラマや映画は見た。凄い演技だ。天才子役と言われる意味が分かる。

「凄いよね。私だったらあんなことできないや」

「そ、そんなこと無いよ。ただ言われた事をやっているだけだもん」

「そうなんだ。あつ、お姉さんとはよく話したりするの?」



「うん。でも、最近の仕事が忙しくて会えていないけどね」  
研究室の方か。

あかりちゃんの復讐は止められないだろう。だが、少しでも悲しみを減らすことができるとは……。

遠まわしであるが、やってみるか。

「あかりちゃんって本とか読む？」

「最近は少しかな。でも、難しい字が多くてさ……」

「確かにね。私が読んでいる本はふりがな付いてて読みやすくてさ」

「どんな話なの？」

よし、ひっかかった。

「とても悲しい話。姉の仇を討つために周りに悟られないように演じて、自分の事を隠して復讐する話なんだ」

「演じて？」

「うん。その子はさ、たった一人の姉の為にある人を殺そうとするんだ。お姉さんはそんな事を望んでいないのに」

お姉さんの――雪村先生の最後の望みは、E組の生徒に光を見せる事。それを死神に頼む訳だ。だが、あかりちゃんは死神が雪村先生を殺したと勘違いしてしまうんだ。

復讐なんて誰も望まない。復讐をした所でその人が喜ぶ訳でも生き返る訳でもないのに……。

「その子は、どうなったの？」

「真実を言われたんだ。殺そうとした相手は実は姉の最後の頼みを叶えようとしていたんだ。君のお姉さんと約束したんだと。で、その子は演じる必要が無くなり、本当の自分で生きていくんだ。」

復讐なんて誰も望まないんだ。

私だったらそんな事、絶対にしない。そんな事しても死んでしまった人は生き返らないからね」

絶対に……。

その時、兄の遺影を抱えながら泣く母を思い出した。

いじめた奴らを絶対に許しはしない。でも、復讐なんてあの正義感の強い兄が許すはずが無いし、兄もそんな事を望まない。兄はずっと耐えていた。なら、私も耐えよう。兄の死を受け入れ、生きていくことを。私は、そう思いながら母の背中をさすっていたんだ。

それから色んな話をして別れた。もちろん、連絡先を交換してだ。

もう時間が無い。あと一ヶ月……月が欠けるまで。

## 第十三話 夕日

いつもの場所、いつもの時間に雪村先生と話していた。話す内容はあまり変わらな  
い。学校で何があったとか、美味しい物の話とかそんな感じだ。あかりちゃんとも上手  
くいつている事も話した。

「先生、その箱……」

「あつ、こ、これはですね……」

顔を真っ赤にして言う雪村先生を見て思わず笑ってしまった。

「プレゼントですか？」

「う、うん。気に入ってくれるか少し心配だけど、ね？」

そのプレゼントの中身はお世辞にも良いとは言えない大きなネクタイだ。プレゼン  
トを受け取るその主もダサイと言っているのだから。そして、そのネクタイが最初で最  
後のプレゼントになるとは思わないだろう。

彼も、もう少し気付くのが早かったら……。

私にできる事はもう無い。やっぱり、無理だった。これ以上直すことはできなかつ  
た。やはり、逆らえないのだろうか。それが物語このせかいの法則だと言うのか。

「悲しそうな顔をしているね。何かあった？」

「いや、これからの事を思うと色々……E組の生徒、どうですか？」

「全然、皆、下を向いてしまっているの。今の皆はE組だからって言うばかりで」

雪村先生は首を横に振って言った。

私に、彼の代わりができるのか少し不安になってきたのだ。

これまでに赤羽、竹林君、渚君、あかりちゃんそして雪村先生に関わった。その中で私の本当の目的を知るのは竹林君と渚君だけだ。まあ、彼らに限って言いふらすことなどはしないだろうが……正直辛い。竹林君とはアニメやメイドの話で盛り上がった。渚君とは一緒に楽器吹いたり、勉強だつてした。他にも色んな話をした。彼はソニックニンジャが好きだと言っていたな。

「教師の私が落ち込んでたら駄目だよね！こういう時は前を向かないと！」

バツと立ち上がって大きな声で雪村先生は自分に喝を入れた。

雪村先生の言う通りだ。私も落ち込んでいられない。私も、頑張らないと。残り一年、この一年は色んな事があるだろう。だが、私が前を向かなくては、A組は動かない。それはつまりE組が前を向く理由の一つが無くなるという事だ。

「私も、頑張ります。やれる事はやります。雪村先生、ありがとうございます！」

「ううん、私こそ。いつも話し相手になってくれてありがとう。それじゃあまたね」

「はい、＼さようなら」

私は、またとは言わなかった。自然と口から出てきてしまったのだ。さようならと。帰り道、私は大きな雫を落としながら歩いていった。

赤髪の少年、この少年の名は赤羽業言う。業と書いて「カルマ」と呼ぶのだ。

彼は、学校で暴力事件を起こし、今は停学中だ。だが、ずっと家でゲームをしているのはつまらなく、久しぶりに家の外に出ていた。

この時間帯では、担任が家に訪れる。何度も来るのでインターホンで対応しているが、今日は珍しく来なかった。

自販機でイチゴ煮オレを買う。彼の好きな飲み物だ。実際はとても甘いらしい。

ストローをさし、一口飲みながら外の景色を見渡す。角を曲がると誰かとぶつかり、尻もちをつく。その反動でイチゴ煮オレは手元から離れ、地面に転がってしまった。まだ一口しか飲んでいないと言うのに。

それよりもだ。カルマは立ち上がり、ぶつかってしまった相手に声をかけた。

「大丈夫……っ！」

三つ編みでまとめられた髪が夕日によって照らされ、前髪で隠れていた目は風に揺らされて見えた。今にも零れ落ちそうな雫が瞳に溜まっていた。

カルマは動揺し、すぐに手をとり、立たせた。

「すみません……」

流れ落ちていく雫を手で擦って止めようとする。瞳の下は赤くなっていた。

少女はふとある一点を見つめるとカルマに深く頭を下げた。彼女が見ていたのは転がったイチゴ煮オレだろう。

「す、すみません！私とぶつかったからですよね……同じ物を」

「いいよ。理由は知らないけど、泣いている子にお金払わすような事はしないからさ。あと、目、あまり擦らない方が良いよ。じゃあね」

カルマは落ちていたイチゴ煮オレを拾うと、少女の前を去って行った。

少女のきていた制服は桐ヶ丘中学校の制服だ。先輩か、後輩かそれとも同級生か分からないが、また会いたいなと思ひ、近くにあつたゴミ箱にイチゴ煮オレのパックを投げ捨てた。

## 第十四話 娘

今日の朝、速報で流れた。

「月が爆発！」

「七割蒸発！」

などと、テレビや新聞ではその話題が持ち切りだ。私はこうなる事を知っていた。あまり驚きはしない。父も驚いてはいなかった。いや、それが普通だ。父は教育の事で頭がいつぱいなものだから。

「いつてきます」

父より遅く家を出る。

いつも通る道に人は少なかつた。やはり月の爆破が関係しているのだろう。

「えー皆さん、朝のニュースは見たと思いますが、月が爆破したと言うニュース。その真相はまだ明らかになっていません。ですが、何かあるかわかりません。今日は午前までの授業となりました」

朝のHRでも月か。

今頃、その犯人が政府と掛け合っているのだろう。

そうだ、雪村先生は……いや、考えるのはやめておこう。

授業はいつもとあまり変わらなかつた。生徒達は少しそわそわとしていたが、帰る頃にはいつも通りだった。

帰り道、私の前に水色の髪の少年がいた事に気付き、肩をとんとんと叩く。

「学さん」

「久しぶり、渚君」

渚君の髪は相変わらず長い。この髪を綺麗にまとめるのがあかりちゃんこと茅野楓だ。

頬に絆創膏が張ってあつた。恐らく、お母さんと喧嘩したのだろう。いや、喧嘩と言うよりも「暗い時」に話してしまったからだろう。彼の家庭も大変だ。

「そーいや今日つて……」

「ん?」

「渚君、今日、うちでご飯食べに来なよ」

「ええ!?!」

「大丈夫、今日は誰もいないからさ」

渚君も家にいたら気が張るだろうし、今日くらいいいだろう。父は会議で遅くなると



言っていたし、母は海外で帰ってくるのは二カ月先だし、家政婦の佐々木さんも今日はお休みだから珍しく一人だ。

「お、おじゃまします」

「そんな固くならなくていいよ」

「いや、だってこんな大きな家初めてだし……」

それもそうだった。

ここに来てから少し感覚が鈍ったような気がする。もちろん、お金は大切にしている。

冷蔵庫の中身を見る。佐々木さんが買出しに行ってくれているからだいたい揃っている。

中には良く分からない調味料もあった。

家庭科の成績はもちろん五だ。だが、レポートが多い訳ではない。ここはシンプルにチャーハン、いやオムライスでいこう。

「適当に席に座つといて。すぐに作るから」

料理はする方だ。佐々木さんの手伝いはする。いつも手間をかけた料理を作っているのだ。少しは手伝いたい。

父がいない時にお菓子を作ったりする。作った後は証拠隠滅だ。まあ、自分の部屋に

冷蔵庫があるからお菓子は隠せる。

卵はふわとろにしよう。流石にお店みたいにはできないが。

「よし、完成」

付け合わせのサラダを簡単に作って終了だ。

「美味しそう!」

「そう言ってもらえるとうれしいよ」

渚君に料理の感想を言ってもらい、後片付けを終えた。

ご飯を食べ終わったら、前に借りてきた映画と一緒に見た。ソニックニンジャだ。見ようと思って借りてきたが、ダビングをしただけでそのままにしていた。渚君がその映画を好きな事を知っている。一緒に盛り上がりながら見ていたその時、ガチャと扉が開く音がした。父が帰って来たのか……。

映画のディスクを抜き、渚君には勉強道具を広げていと伝えて私は玄関に行った。

玄関にいたのは父では無く、母だった。

「か、母さん!?!何で、帰ってくるのは二カ月先じゃあ……」

「ただいま。ほら、月のあれ。仕事場でも色々あつてね。一度家に戻ろうと思って直行便で帰って来たの」

「そ、そうだったんだ」

母でよかった。父だったらめんどくさい事になっていた。

「あら、誰か来ているの?」

玄関に並べられた靴を見て言った。

「う、うん」

「別に怒りはしないわよ。むしろ大歓迎だわ」

本当にこの人が母親で良かったと思う。

母と一緒にリビングに行く、渚君がそそくさと立ち上がっておじやましていますと言った。

「そんなに固くならなくていいわよ。それにしても、男の子なのに髪が長いのね。それもいいわね!」

「は、はあ……」

うちの母はファッション関係の仕事をしているため服には少しうるさい事がある。ちなみにこの柵ヶ丘の制服を考案したのは母である。

何故このような感じになったかと言うと、母は女子の服を可愛くしたかったからだという。つまり、女子の方を考えてからデザインに合うように男子のを考えたとい事だ。母は可愛い物好きだから仕方が無いだろう。

「お名前は?」

「潮田渚っていいいます」

「渚君ね。これからも学と仲良くしてあげてね」

「は、はい!」

母が私の事をちゃんと思ってくれているのは嬉しいのだが、本人の前でそう言うのは止めて欲しい。

「今日はごちそうさまでした」

「うん。また来てね。まあ、父さんがいない時になるけど」

小さな声でぼそつと呟く。それに渚君は苦笑を浮かべた。

またねと言って渚君と別れた。

家に入ると母がにやにやしていた。

「学、あの子が本命なの?」

「本命とかないから。渚君とは友達。はい、この話終了」

「もう、学には恋とかないの? 母さん悲しいわー」

正直、今は考えられない。私にはやる事があるから……。

浅野學峯は今日、会議があり、いつもより遅い帰宅となった。

暗い部屋に電気をつけ、適当な物でご飯を作ろうと思ひ、冷蔵庫を開けると、すぐ手

前にラップされて置かれていたオムライスとサラダがあった。オムライスの皿にはテーブルで書置きが張られていた。

『お仕事お疲れ様です。粗末な物ですがどうぞ食べて下さい』

娘とはここ最近いや、何年も会話と言う会話をしていなかった。娘は自分といると暗い顔をする。それも仕方が無いことだ。強い生徒を育てるためには支配する必要がある。その仕組みを中学生になるまでずっと教えてきた。

だが、娘はその所為で自分に対して表情というものを見せなくなってしまった。娘が言う言葉は“はい”と“分かりました”その返事だけとなった。

娘が隠れてアニメや漫画を買っている事も知っている。その事について指摘しなかったのは何故なのか、自分でも分からない。これが父親と言うものなのかさえも。

自分の理想は変わらない。強い生徒にするということ。だが、娘は強い生徒に育っているのか。彼女は学校ではりっぴにやっている。それはよく耳にする。では、家ではどうだろうと。全く知らなかった。

今、自分の手の中には娘が書いた書置きだった。丁寧な字で書かれた文字は教師でも父親でも無く、他人に向けた言葉のような気がした。

## 第十五話 集会

中学三年生にようやくなった。ここまで長かったような短かったような……。

忘れてはいけない。ここがスタート地点だということ。完璧とはいかないが、演じきってみせよう。浅野学秀 浅野学に。

「皆さん、進級おめでとうございます。進級し、気を抜かないように。そんな事をすれば皆さん、E組のようになってしまいますよ」

新学期早々にE組いびりだ。校長の話に乗っかって生徒達は馬鹿にするようにして笑う。

A組はE組と反対側にいる為、E組の様子は見れない。だが、見なくとも分かる。彼らは下を俯いている。だから、このE組の制度は今年で終わりにする。

「五英傑は全員A組だね」

蓮が前髪をいじりながら言った。

五英傑は、A組の中でも、特に成績の良い五人の生徒達の事を指す。五英傑の中でもそれぞれ得意科目があり、蓮は国語、瀬尾は英語、小山夏彦は理科、荒木鉄平は社会、そ

して私は数学だ。五英傑ができたのは昨年のことだ。一学期の期末で総合点が凄かったからだ。

さてと、私は彼になりきらなければならない。最初の掛け声行きますか。

「みんな！A組は本校舎で頂点に立つ選ばれた者達が集まる場所だ。私達がこの学校を引っ張っていくんだ！だから、私に付いて来てくれないか？」

「もちろんだぜ！」

「浅野さんがそう言うなら！」

一人が言いだすとそれに釣られてもう一人、もう一人と声をあげていく。つかみは完璧だ。

父に教えてもらった「支配」という言葉。私は自分の都合の良いようにみんなをまとめ上げているだけだ。さっきの言葉も綺麗事にすぎない。この一年、悪役になろうじゃないか。

あつという間に一カ月は過ぎ、月に一度の全校集会がやって来た。

相変わらず、校長先生のE組いびりには呆れる。生徒達は口を大きく開けて笑っているが、私は人間関係から学んだ方が良いと思う。幼稚園児でも悪い事したら謝る。だが、こいつらときたら人を見下して笑っているだけだ。頭が良いからってそんなに偉い

のか？これは今の私の言葉では無い。過去の私の言葉だ。

過去の私は今ほど頭が良いとは言えなかったし、運動も得意ではなかった。

頭の良い奴に限って馬鹿ばかりやる。本校舎の奴らは全員そうだ。もちろん、教師も含めてだ。

「続いて生徒会からの発表です。生徒会は準備を始めて下さい」

私の出番か。

舞台裏に上がり、ホワイトボードを舞台に出したりと準備をした。私は生徒にプリントを配り終わるとまた舞台裏に戻った。

司会進行役は荒木の役だ。だが、こいつも同様だ。

「すいません、E組の分まだなんです」

E組の学級委員長磯貝悠馬君が挙手をして言うが、荒木はそれを笑いに返して言う。それに乗った生徒達が笑いだす。

E組のみんなが下を向いたその時、一瞬にして何かが通り過ぎたかのように生徒達にプリントが行き渡った。さっきまでいかなかった大きな先生が現れ、その先生にちよっかいを出す女性の先生がE組の担任の先生に連れて行かれる。その様子を見たE組の生徒達には笑顔が浮かんだ。

これが月を破壊した超生物……いや、殺せんせーか。



集会在終わり、私は後片づけをしていた。

「E組の奴ら、調子乗ってねえか？」

「確かにー」

あちらこちらでE組の噂が聞こえる。

お前達が言えた事か。次に後悔するのはお前達なんだから。

## 第十六話 聖地巡礼

六時間目が終わり、掃除の時間になった時、一人の生徒が窓からE組の校舎の方を指差して驚いていた。E組の校舎の方には巨大竜巻が発生していた。

それから数日後、中間テストも明後日という日に理事長自らが教壇に立ち、テストの変更部分を指導した。

自分の主義はどんな手を使つても貫く……か。ゲームに負けたく無くてズルをする小学生のようだと思つた。

中間テスト当日。

テストは二日かけて行われる。一日目の最初の教科は数学だった。教室にはペンを走らせる音だけだった。

私が中学生「だった」頃では解けない問題ばかりだが、今となつてはペンを止める事無く答えが書ける。だが、E組の生徒たちには難しいだろう。変更さえなければ勝機はあつただろう。

二日間のテストは終わり、その次の日、テストが返つて来た。もちろん、全て満点で無ければ父に何を言われるか分からない。手は抜かなかつた。

「流石だね。学さん。学年トップか」

「ああ。だが……」

一人だけそんな反則技を諸共としない生徒がいたようだ。

「赤羽業……」

全てが九十点以上で、数学は百点。学年では五英傑の一人を差し置いて四位だ。

彼らは壁にぶつかつた。だが、それは間違いではない。その壁を乗り越えるために彼らは次の刃を育てていくのだろう。

「私も頑張らないとな」

誰にも聞こえない小さな声で呟いた。

中間テストが終わり、中学三年生である私達はこの一年でも大きなイベントとも言える修学旅行がやってきた。

目的の場所は京都。高層ビルが多く並ぶ東京に住む私達にとって古い家の街並みはとて面白いだろう。それと、何より京都を舞台としたアニメも少なくは無い。『聖地巡礼』という奴ができるのだ。そんな事もあり、私はこの日を楽しみにしていた。

「浅野さん、お菓子食べるかい？」

「いいや、私はいいよ」

相手が差し出してきたのはサラダ味のお菓子だった。私はチョコの方が好きだ。サラダ味で好きなのはせんべいぐらいだ。

人数の関係上、一人だけ余ることになった。そこに私が自ら入ったのだ。もちろん、誰かと喋るのが嫌からだ。

さて、今日の曲はアニメのBGMだ。ちなみに何のアニメかと言うと、王都を追放された七人の大罪人達が戦う話だ。

最近のアニメのBGMは本当に素晴らしいと思う。戦闘シーンは一番盛り上がりながらなければならぬ場面だ。そこで重要となるのがそれを盛り上げる曲だ。BGMもただのBGMでは無い。歌詞が入っているものが多く見られるようになった。それらの多くは戦闘シーンで使われるのだ。

「かっこいいなあ」

本を読みながら聞いていると、戦闘シーンの曲が終わり、今度は悲しい曲が流れていた。過去の回想シーンに入る時などに使われる事が多い。このような曲を聞くと、その時のシーンを思い出し、涙が出てきてしまう。

どれもとても良い曲だ。

そうやって曲を聞いていると、いつの間にか京都に到着した。

「E組は俺らと違ってボロ旅館だつてよ」

「可哀想だねー！ははっは！」

いや、むしろ羨ましい。旅館で描かれる方が多いのに成績優秀者だけはホテルなのだ。この制度をどうにか変えてもらいたいものだ。

だが、一人一つの個室というのにはありがたいな。それに、明日は自由行動だそうだから、これだったら好きに色んな所が回れる。行く場所はだいたい目星は付けてある。

京都限定のアニメグッズも欲しい所だ。

「カメラの残量も大丈夫だ。あつ、森さん達のお土産も買おう」

何だかんだで私もテンションが上がっていた。

## 第十七話 テスト前

修学旅行、球技大会が終わり、一学期もあとは期末テストだけとなった。もちろん、手を抜くつもりはない。

「私達は太陽だ。名門桐ヶ丘中で上から皆を照らしている」

こんな厨二病みたいな台詞、私の黒歴史として頭の中に残るだろう。仕方が無いことだ。うん、本当に仕方が無いことだ。

「この学校の光を守ろう……私と共に！」

私が綺麗事を言うとかクラスの皆は賛同して拍手と声援を送るのだ。もう慣れた事だ。

「浅野さん、この問いの事なんだけど……」

「ああ、確かにそれは難しいよね」

理事長から言われた事だ。A組の成績を上げろと。その為に放課後という貴重な時間を使って勉強会を開いたのだ。これで勝てなかったら一人ずつ殴ろうかと考えてるくらいだ。

「と言ってもこの期末テストは負けなければならぬのだが。」

「えっーと、それは公式を使って……」

憂鬱である。

私は先生じゃないんだ。これくらい自分で教科書とノートを持って先生にでも教えてもらえよと思うんだが。

他の五英傑達を見ると、蓮は女子口説いているし、瀬尾は相変わらずのALに住んでいましたよ自慢。荒木は腹が立つような言い方で責めるし、小山は暗記、暗記うるさいし……。

「はあ……」

思わずため息を吐いてしまった。

今日の勉強会が終わり、帰る前に理事長室に寄るようにと言われていた事を思い出し、理事長室に向かった。

「浅野です。失礼します」

学校では親子なんて関係はない。教師と生徒だ。

「A組全員がトップ五〇に入り、五教科全てでA組が一位を独占するのが合格ラインだ」  
そうしたのは山々だ。理事長の言う事を聞かなければどうなるか分からない。だが、この勝負の結果は知っている。だとしても私は「彼」にならなければならぬ。

「では、こうしましょう理事長。私の力でその条件をクリアしましょう。そうしたら、生徒では無く、娘として一つおねだりしたいのですが」

「おねだり……？父親に甘えたいとでも？」

まさか、私が生きてきた十四年という短い人生で一つもそんな事は言つた事が無い。これも「彼」の為だ。

「私はただ知りただけです。E組の事で何か隠していませんか？」

一瞬、理事長の表情が変わつた。

「まさかと思いますが、教育以外にもやばい事に手を出していらつしやるのか？」

私が喋ろうとすると頭の中に台詞が流れてくる。カンペという奴だ。

本来、彼が言うはずだった台詞を私が代わりに言っているにすぎない。

「知つてどうする。ネタにして私を支配するでもする気かい？」

「当然でしょう。全てを支配しろと教えたのは貴方ですよ」

「流石は最も長く教えてきた生徒だよ」

不気味な笑い声が乾いた部屋にヒビを入れていった。



## 第十八話 テスト当日

二日後、私を除く五英傑がE組と何やら賭けをしたようだと言っていた。全く、お前らは幼稚園児かと言いたくなかったが、それは心の奥底にしまっておいた。

「で、賭けの内容はまだ決まっていらないんだよね？」

「あ、ああ」

「それじゃあ、こうしよう。勝った方が下せる命令は一つだけ。その命令はテスト後に発表する。E組に伝えておいて」

私は鞆の中からも持ち歩いているノートパソコンを取り出した。このノートパソコンには二つユーザーを作っている。一つは学校用、もう一つは外出の時に使うプライベート用だ。学校用の壁紙はシンプルだが、プライベート用は好きなアニメの壁紙だ。これを見られたら終わりだろう。

マウスじゃなくて、マウスパッドでやっているからとてもやりにくい。

テキストを開き、いつもの高速ブラインドタッチでその命令を作った。

「私達からの命令はこの協定書に同意する。その一つだけだよ」

彼はこんな事を一瞬でよく思いついたなど色んな意味で尊敬するよ。

これを作った私が言うのもあれだけど、こんな事をされたら邪魔なだけだなあと  
思ってしまった。

「皆、私がおれを通して言いたい事は、やるからには真剣勝負だつて事だよ。どんな相手  
も本気を出して向き合おう！それが皆を照らす私達A組の義務なんだ！」

ただの綺麗事だ。でも、本気を出さないと殺されちゃうよね。

こうして、試験当日がやってきた。

一時間目は英語。

この問題つて確か、サリンジャーの「ライ麦畑でつかまえて」だつて。

幼い頃は一人じや家からあまり出られなかつたから、うちの無駄に広い書庫に籠つて  
本を読んでいたからなあ。有名作はだいたい読んだつもりだ。

本、有名作と言えば、日本の文豪かな。文豪と言えば、最近では新しい漫画にはまっ  
たんだよねえ。それが文豪をイケメンにして異能力でバトル！っていうストーリー。  
ああいうのは好きだ。

二時間目は理科。

理科つて、○○は何故○○するのですか。という高得点問題が多い。これは絶対に外  
してはならないものだ。

三時間目は社会。

可能性のあるものはチェックする。それが私の勉強方法だ。

毎朝の新聞は確認する。家に帰って来た後に、新聞をコピーしてファイルにとじる。これはいつもの日課だ。もちろん、そのおかげで今年のアフリカ開発会議の首相の会談の回数も分かった。

四時間目、国語。

百人一首は小学生の頃に百人一首大会なるものがあつたから全て覚えていてよかった。それも、好きなアニソンの替え歌にしたお陰だ！

「終了。答案、後ろから持ってきて」

テストは二日かけて行われる。明日は五教科最後の数学と、実技四教科の内の三つ。音楽と技術家庭科だ。

家庭科は問題無い。だが、技術はミスが多いんだなあ。覚えにくい。歌にしにくいし……。とりあえず、頑張ろ。

二日目

「始め！」

最初から数学はきつい。だが、大丈夫。父が出て言った後に防音の自分の部屋で三曲

歌を歌ってきたから目は覚めている。

数学は赤羽だっけ。彼は今回、壁にぶつかってしまっただろうな。

実技のテストも終わり、帰宅となった。

帰りに渚君を見かけた。その隣には赤羽と……あかりちゃん。髪の色を変えてしまったんだね。

私は鞆の中からマスクと髪留めを取り出し、髪は二つくりにした。マスクをするだけでも印象は変わるものだ。

「渚君」

「が、学さん！」

まさか私が声をかけるとは思わなかったんだろう。渚君は私のこの髪型を知っているからね。

「学って、浅野？って訳無いか」

「よく間違われるんだ。私の名前は諸星学っていうの。渚君の友達？」

「うん！私は茅野カエデ」

「赤羽カルマ、よろしくね」

よろしくと返した。

諸星は母の旧姓だ。とっさに思いついたのがそれしかなかった。

「俺達、E組だけど、話していいの？」

「別にいいよ。皆はE組だからって言つて悪く言うけど、私は嫌だからさ。友達のことを悪く言うなんて最低でしょ？」

本当の事だ。渚君も竹林君も私にとって大切な友達だ。E組だからっていう理由で友達という関係が崩れるなんてそれは友達じゃない。そんな友情は捨ててしまった方が良く。だから友達は選べつていうんだよね。

「渚君、最近いきいきしているね。E組で良い事でもあつた？」

「う、うん。まあ……ね」

暗殺の事は誰にも話してはいけない。仕方がないことだ。

「私、家あつちだから。また会つたらゆつくり話そうね。バイバイ」

私は手を振つて別れた。

## 第十九話 リストバンド

テスト返却だ。これで全てが決まる。

最初は英語。

「浅野、九十九点だ。おしかったな」

「ありがとうございます」

うーん、いつものケアレミスだ。直さないとなあと思っているが、これがなかなかなのだ。

九十九点、学年トップはE組の中村莉桜か。こっちの五英傑の英語さんは三位。

次は国語。

「学年トップだ。よかったな」

国語は百点。いやあ、怖かった。国語の前の日なんて本の続きが気になりすぎてシリーズ物を全て読破してしまったからね。数学の次に得意な教科だったからよかったけど。

次は社会。

「九十五点、二位か」

これもケアレスミスだ。小テストだったら絶対に正解する所を間違えている。理科は二位。そして、数学はもちろん、百点で一位だ。

「3年A組浅野学さん、理事長先生がお呼びです。至急、理事長室へ来て下さい」  
くると思ったさ。E組に三つの教科のトップを取られたのだから。

「失礼します」

この瞬間がとても嫌だ。

絶対、この前の事で責めてくるんだろうなあ。

「個人総合一位キープおめでとう……と言いたい所だが、なにやらE組と賭けをしていたそうじゃないか。そして、その賭けに君は負けた」

別に私が吹っかけた訳じゃないのに……連帯責任という奴である。

「ありもしない私の秘密を暴こうとしたり……良く言えたものだね。同い年の賭けにも勝てない未熟者が」

ありもしない、か。

否定はしない。私は負けた。それが事実だからだ。

手を握る力が強くなる。私は超人では無い。だから手を強く握ったって、血が出る事はない。だからこそ余計に腹が立ってくる。

思い出した。私が中学生だった頃の話だ。あの時の自分は平凡で、頭が良いのか悪い

のかと言えば悪い方だ。テストの点数はいつも六十点か七十点。苦手な英語は四十点を取った事だつてある。ちゃんと勉強しなかった自分が悪かったと後悔する。そんな悔しい思いをしてもなかなか変わらないのが人間である。最近はなかったのに、中学三年生になってまた思い出してしまった。この心がぽっかりとあいた悔しさを、強く握りすぎた所為か掌に爪の跡が残っていた。

三日後、期末テストの後はすぐに終業式だ。

「おお、やっと来たぜ。生徒会長サマがよ」

何だかんだで、E組と顔を合わせるのは初めてだ。

寺坂つて初めて見た。生寺坂だよ。

「分かつてる。賭けの話だろ？君達が望む物を手に入れられたんだからそれでいい」

特別夏期講習、沖縄離陸リゾート二泊三日だつて。

彼らは暗殺しにくいんだらう。でも、その暗殺が最悪な結果になってしまふ。ウィルスに感染してしまうはずだ。渚君か竹林君に何らかの形で忠告はできないだらうか……。

「えー……夏休みと言っても怠けずに……E組のようにならないよう」

いつものE組いじりもウケが悪い。言つた通りだ。次に後悔するのはお前らだつて。



教室に戻ると、自分たちから賭けの事を言いだした五英傑達は何故か開き直っていた。その所為でクラスメイト達は怒っていた。

「うるさい。ちよつと黙っててくれないかな」

物語通り動いているんだ。仕方がない。私がどれだけ勉強してもここで負けなければ、E組は変わらないんだから。

帰宅する前に渚君にメールを送る。

二十日は過ぎてしまったが、彼の誕生日だ。時間があまりなくて渡せなかった。場所はいつものカフェだ。

「あつ、お帰りなさいませ、お嬢様！」

彼女の名前は小川まこさん。ここでバイト中の大学生だ。

「マスター久しぶりです」

この店に来るのは久しぶりだ。

マスターはお辞儀をすると、ケーキを出してくれた。常連さんの好みは把握済みという訳だ。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「えっ」

渚君だ。最初の反応は皆これだ。

私は渚君に手を振る。それに気付いた渚君は私の隣の席に座った。

「学さんもこういう所来るんだね……」

「うん。常連だから。マスターのケーキは美味しいよ。マスター、チーズケーキお願いします」

「承知しました」

相変わらず、マスターは無口だ。

「学さん、僕に用って」

「そうそう、これを渡そうと思って」

私が渚君に渡したのは綺麗に包装されたプレゼントだ。中身はリストバンド。男の子は何が欲しいのか分からなかった。竹林君ならアニメグッズだ。

「リストバンド！ありがとう、大切にするよ！」

「そう言ってもらえて嬉しいよ」

森さんが入れてくれた紅茶を一口飲んだ。

## 第二十話 ビー玉

夏休みは約三十日ほどあるが、一日ゲームばかりしていると時間が過ぎるのが早い。あつという間に最後の一日になってしまった。

そういうえば、今日に神社の方で祭りがあるんだっけ。せっかくだし、変装して行こうかな。

夕方。

髪型ばつちり、マスクもばつちり、服装も地味目の選んだから大丈夫なはず……。

父さんは今日は企業のお偉いさんと高いレストランで食事するらしいから私がお祭りに行ったなんてバレない！

お祭り会場に行くと多くの人で賑わっていた。

「ラムネを一つ」

「あいよー」

ラムネを飲めるのはお祭りくらいだ。

おじちゃんにフタを開けてもらったラムネを受け取り、百円玉を渡した。

炭酸が効いていて美味しい！そして、ラムネを飲み終わった後にラムネのフタを開けて、ビー玉を取り出す。よく集めていたなあー

「諸星さんじゃん。来てたんだね」

「うん。赤羽君も？」

「まあね。誘われてさ」

彼から話しかけられるとは思わなかった。

赤羽君だけじゃなくて他のクラスメイト達も来ているそうだ。こんな話あったんだなあ。まあ、忘れるのも仕方がないか。もう十五年、記憶が薄れていてもおかしくはない。

「赤羽君、ゲーム機当てたんだ。でも、あそこの糸くじ、あたりなんて入っていないでしよ？」

「知ってたんだ」

「あの屋台は私が小学生の頃からあつてさ、私も赤羽君と同じ事をしたんだ」

あのおじちゃん、学習しないなあーちなみに、その時の景品は今も家にある。一度壊れちゃったけど、直したんだよね。懐かしいなあーパソコンとにらめっこして修理してたっけ。

「諸星さん、頭良かったんだ。もしかしてA組？」

「まあね。でも、A組なんて関係ないよ。同じ人間である事に変わりないし。少しスartetダツシユが速かっただけだよ」

もし、私に前世の記憶がなかったら、E組を悪くいつていたのかな……。

もし、私に前世の記憶がなかったら、彼のようになっていたのかな……。

「諸星さん? どうしたの、ぼーっとして」

「ごめん、考え事してた」

空を見上げると、ドーンと大きな音が鳴って、夜空に綺麗な花が咲いた。

「俺さ、前に諸星さんみたいな綺麗な髪をした女の子を見かけてさ」

「それってお世辞?」

「いいや、本当に綺麗だよ。同じ中学の制服着てて、ぶつかった時泣いてたんだよね」

間違いない。あの時にぶつかった人だ。

雪村先生と最後の会話になった後、私、泣いてて……で誰かにぶつかったんだ。涙で前がぼやけてて誰か分からなかったけど、まさか赤羽君だったとは。

「諸星さんじゃないかなって思ってたさ」

うん、そうだね……。

「私は違うよ」

「そっか」

私は諸星学じゃなくて、浅野学だから。

いつか本当の事を話さなくてはいけない日が来るんだらうか。  
私はビー玉を通して夜空を覗いた。

## 第二十一話 パルプンテ

二学期早々、私とE組にとつては最悪、A組いや、理事長にとつては嬉しい日だろう。「今日から三年A組に一人、仲間が加わります。昨日まで彼はE組にいました。竹林孝太郎君です！」

竹林君は用意された文章をそのまま読んだ。その文章はE組にとつて最悪なもの。そして、偽物だ。

竹林君の家の事情は知っている。親の鎖がとても痛いのは良く分かる。だから無理には言えない。だけど、それでいいのか……君は、家族の信頼を得ると同時に大切な友達という繋がりを失ってしまうんだよ。

次の日、竹林君は知るだろうね。A組の姿を。

一時間目は数学だ。相変わらずこの先生の教え方は効率が悪すぎる。思わずため息を吐いてしまう。

私はちらつと後ろの席の竹林君を見た。彼も呆然としているようだ。

一日の授業が終わり、下校時刻となった。

「どうだい、竹林君。クラスにはなじんだ？」

「ま、まあ……」

私は窓から外を見る。良い人達だ。A組に行ってしまった彼を心配して様子を見て来ている。あんなに良い友人はできないものだ。

「竹林君、君はこれでいいのか？」

「どういう事かな」

「……いや、何でも無い。理事長が呼んでいる。理事長室に行こう」

竹林君、気付いてくれ。

理事長室に入るが、今は留守のようだ。呼びだしておいてそれはないだろう。

竹林君は理事長室を見渡していた。

「あつ、そこら辺の物に触れない方がいいよ」

前に理事長の私物を壊して問答無用でE組送りにされた人がいたらしいからね。

しばらくすると、理事長が笑顔で戻って来た。この笑顔はやっぱり苦手だ。

明日はこの学校の創立記念日だ。創立記念日なら休みにしてくれないかと思うんだが。ああ、でもそうしたら夏休みか冬休みのどちらかが一日減ってしまう可能性があるから駄目だな。



「浅野さん、原稿はできているかな？」

「はっ」

私は先日、理事長に言われた通りの原稿を作った。自分で作って言うのも何だが、酷いものだ。ありもしない事を並べたデタラメな文章だ。

「君はまだ弱者を抜け切れていない。これはそのステップの儀式だよ。強者になるんだ。竹林君。強くなくてはご家族が見てくれないぞ」

理事長の洗脳教育。私は何年も受けてきた。もちろん、実際に洗脳にかかった事は無い。

「やります……」

竹林君と別れた後、私は下駄箱に行き、誰も見ていないか確認し、竹林君の下駄箱にそっと紙切れを忍ばせた。

集会で竹林君が舞台に立った。

私は舞台裏でそっと彼を見ていた。

「僕のやりたい事を聞いてください。僕のいたE組は、弱い人たちの集まりです。学力という強さがなかった為に本校舎の皆さんから差別待遇を受けています。でも僕はそんなE組が、メイド喫茶の次ぐくらいに居心地良いです」

私は口元が緩んだ。

彼らしい答えだと。

「僕は嘘を吐いていました。強くなりたくて、認められたくて」

自分に嘘を吐き続けたらもう戻れない。私だつてそうだ。時々本音を言わないと心が折れそうになって、自分を見失いそうになる。

「でも、もうしばらく弱者でいい」

そうだ。強者じゃなくていい。弱くていいんだ。絶対に折れない心と、大切な繋がりを持つ友人がいれば。

竹林君は理事長の部屋からくすねてきた表彰盾を取り出し、木のナイフでそれを割つた。

「浅野さんが言うには過去これと同じ事をした生徒がいたとか。前例から合理的に考えれば、E組行きですね、僕も」

竹林君は良い顔をして舞台から去つた。

すれ違いざま、私は竹林君に言った。

「君はとても良い選択をしたと思うよ」

「そう言う君こそ、わざわざ理事長の部屋に忍びこめるルートが書かれた紙を僕の下駄箱に入れておくなんてね」

「さあ、何の事か」

竹林君の騒動から数日が経った頃、私は竹林君に呼ばれた。その待ち合わせ場所はメイド喫茶白黒だ。

「魔法をかけます！どうなるか分からないよーパルプンテー！」

「お、お姉さん！ドラクエ知っているんですか！」

「もつちろんでーす！私は8が好きです！」

「そうですねー確かに8のストーリーはとてもよかったです。まさか主人公が！でも私は7も好きですよ。何と言っても内容がいいです。過去の時代で起きる悲しい出来事が……」

パルプンテをかけられたポテトを食べながらドラクエの話を膨らませていく。

まさかドラクエ好きがいるとは……ドラクエを知っている人もやっている人が周りにいないからなあ。

ちなみにパルプンテは何が起こるか全く分からない呪文の事だ。

それにしてもポテトの塩加減が上手い。これはパルプンテ成功だな。

「おっと、竹林君ごめんよ。ゆりりん、また今度ー！」

さつきのお姉さんのあだ名はゆりりんと名札に書いてあった。やっぱりメイド喫茶はいいね。

「で、竹林君、わざわざ私を呼び出したのは前の事？」

「うん。君には助けられたからね」

「いやいや、私は何もしていいいよ。それにしても美味しいな。あのー！コーラお願いしまーす」

すぐにコーラは届き、メイドさんと一緒に魔法をかけた。今日についてはいるようだ。また魔法が成功した。

「E組はどうだい？」

「ああ、楽しいよ」

彼は親の信頼よりも友達の手繋がりを選んだ。これ以上、大切なものはないだろう。

本当、何が起きるか分からないね……。

## 第二十二話 ウソつき

またこの季節がやって来た。そう、体育祭だ。

体育祭の前に、ある情報……ではなく、理事長から呼び出され、E組にまた違反をしている生徒がいるからどうにかしろと言われた。

学校から少し離れた喫茶店に来た。

「おや、バイトしている生徒がいるぞ。いーけないんだなあー磯貝君」

「これで二度目の重大校則違反、見損なつたよ。磯貝君」

磯貝悠馬。彼がE組に落とされた理由は、バイトだ。

櫛ヶ丘中学校ではバイトは校則違反と生徒手帳に書いてある。どんな理由があろうとも絶対に許してくれないのがこの理事長だ。

「浅野……この事は黙つててくれないかな。今月いっぱいに必要なお金は稼げるから」

「そうだね。私も出来ればチャンスをあげたい」

平等じゃない。

誰だつて親を選べないように、産まれる場所だつて、環境も選べない。

もし、私が磯貝君と反対だったら……何か変わっていただろうか。

「では、条件を一つだそう。闘志を示せたら……今回の事は見なかった事にしよう」  
体育祭の棒倒しだ。

だが、それは男子が出る種目だ。女子である私は出れないのだ。

これ以外良い見せ場がないのだ。A組とE組の対決は他のクラスを見て、圧倒的な差でA組が勝つたと見せびらかしてこそ意味があるのだ。

「でも、男子の差は公平ではないからね。だから、君らが私達に挑戦状を叩きつけてきた事にすればいい。それもまた勇気ある行動として称賛される。体育祭、楽しみにしているよ」

私は出れないからなあ……でも私が欠けては今のE組には勝てないからね。ここは助っ人を呼ぶか。

翌日の放課後。

教室に五英傑と、昨日に呼んだ助っ人達が集まっていた。

助っ人は外国人だ。

アメリカ、フランス、韓国、ブラジルから呼んだ知り合いだ。全員十五歳だから違反ではない。こうでもしないとE組にすぐ負けちゃうだろうしね。接戦で負けたらいい

くらだ。

ここから演劇の時間だ。

「今回の棒倒しは棒を倒す事が目標じゃない。これを通してE組の皆に反省してほしいんだ」

二年半続けてきたんだ。ここで終わりにさせない。壊れないように、ルールを引こう。

当日、調子は良いようだ。これなら総合優勝は确实だが、本音はそっちではない。E組との棒倒しだ。

別に男子に生まれ変わりがたかったわけではないが、簡単に倒れないかが心配だ。その保険として、少しだけ陣形を変えた。

何年前かに棒倒しの話を憶えている範囲で全てノートに書きだしてよかった。E組の策が通じるように、私が棒を守っていなくても大丈夫なように……。

少し線路変更しても良い。最後、結果が同じになればいいんだ。

「その事に気付くのが少し遅かったんだよね」

竹林君の件だ。私が竹林君と深く関わってしまった、原作以上に私にとっては大切な友人になってしまった。だから私は理事長室に忍びこめるルートを手紙に書いて、下駄箱

に入れた。結果、彼だけでなく、共犯私がいる事で少し線路変更してしまったが、原作通り、彼はE組に戻った。

「上手くやつてくれよ……」

E組は原作通りの動きでくる。だから陣形さえ憶えていたら再現するのは簡単だ。パソコンのシミュレーションで何パターンも挑戦し、接戦だったが、A組が負けるといふシナリオを作り出した。

今回はA組もE組も私のチェス盤の上だ。シナリオ通り動いてくれよ。

少し、ヒヤヒヤする場面もあったが、棒倒しの勝者は、E組だった。私的にはとても満足な結果だ。だが、あの人は喜ばない。

「試合に負けては何の意味もない。君はリーダー失格だな」

そうだ。私はリーダー失格……いや、私は誰かの上に立つ資格など持っていない。元々、リーダーという柄でもないし。

「そりや違うだろ。理事長サンよ」

ケヴィンが弁解をしてくれているが、それ無効化だ。何故なら、この人は、〃敗北〃という言葉は何よりも理解しているからだ。

理事長は大男四人をボコボコにしまった。

「ねえ、浅野さん。負けたと言うのに君は……死ぬ寸前まで悔しがってないのかな？」



自分の父親が何よりも怖いと思つていた。だが、今までの怖さとは違う怖さだ。ふと、父親が化け物のように見えた。

駆けつけた救護班に理事長室までと言う。

児童玄関前にいたE組に話しかけられた。

「おい、浅野。二言は無いよな？ 磯貝のバイトの事は黙つてるって」

「私は、嘘は吐かない」

そう吐き捨て、E組から離れた。

蓮達を下を俯きながら歩いていた私に駆け寄つて来た。どうやら慰めてくれているようだ。彼らだつて悪い人では無い。だが、あの人の教育法は間違つている。

「今夜は皆で高級ダイナーで打ち上げしようじゃないか」

「……すまない。私は抜けさせてもらう」

私は自分の荷物を手に持ち、蓮達から逃げるように学校を出て行つた。

学校が見えなくなると、私は走り出した。家に着くと、階段を駆け上がり、自分の部屋に閉じこもつた。

「はあはあ……」

息が切れ、酸素を取り入れようとする。それと同時に目頭が熱かつた。

息が整うと、今度は何故か、笑いが止まらなかつた。急に笑いは止まり、力が抜けたようにしやがみこんだ。

「何が、嘘は吐かないだよ……」

私は、ウソつきなのに。

## 第二十三話 死神

体育祭が終わり、次は中間テストだ。A組は前回より勉強時間を増やし、難問に対応できるように放課後に勉強会を何度か開いた結果、クラス全員が五十位に入った。だが、E組（彼ら）が本気でテスト勉強していたら分からなかったかも知れない。

下校中にテストの結果が良いものとは言えず、俯いているE組を見かけた。

「拍子抜けだったなあ」

E組に喧嘩を売る五英傑。用は自慢をしているのだ。

「この学校では成績が全て。下の者は上に対して発言権は無いからね」

言っではいけない事を言ってしまった蓮。私は一位だから別に何の問題も無いが……。彼らは学校の掲示板に張り出された成績順位を見ていないのだろうか。二位は、

E組で最も優秀な人だ。

「へーえ、じゃ、アンタらは俺に何も言えないわけね」

赤羽君。

前回の期末の結果は最悪だっただろう。壁にぶち当たった彼は夏休みに予習をした。そして、殺し屋としても成長した。

「気付いていないの？今回本気でやったの俺だけだよ」

赤羽君の言う通り、E組は二週間、トラブルでテスト勉強ができなかったのだ。櫛ヶ丘中学校のテストはそれで満点をとれるほど優しくはない。

私の役目も次で最後だ。二学期期末テスト。

A組からD組までは内部進学となり、三学期は本校舎期末を受ける事になる。つまり、同じ条件で受けるテストは次が最後となる。

「そこで全ての決着をつけようよ」

ここまで長かった。私も今までの事をぶつけよう。次のテストで……。

寝る前に私はこれから起こる出来事を全て書きとめたノートを見る。どれだけ重要な記憶でも繊細に憶えている事は少ない。物心付いた頃から書いたものだ。今では大雑把な事しか覚えていない。

「中間テストが終わったって事は、園の話が終了。次は……死神編か」

死神編は確か、ピッチ先生がいなくなつて……で、死神が現れて……待てよ？死神の顔が出てこない。これはまずいな。でも、浅野君は関わっていないから大丈夫だろう。

さて、今日はこれくらいにしておいて寝るか。

部屋の電気を消して、布団の中に入った。

翌日、いつも通り授業を聞いて、委員会の仕事を終えた。

うちの学校の生徒会だけ三年生が三学期まで委員会をやらなくてはいけないからめんどくさい。皆、塾とかあつて結局私が最後まで仕事をやったし……。

もう十月だ。夜七時となるともう暗い。

「まあ、狙われるとかそんな事はないか！」

攫われたら身代金を要求されても、私の家は貧乏なのでお金無いですって言うかな。前にも同じような事を考えた気がする……。

頭の中を整理しながら思い出そうとしていると、後ろから引つ張られて、布のような物を口に当てられた。

抑えられている手が強く、はがせない……。そうしている間に車に乗せられ、ドアを閉められる。声が出せない今、暴れても意味がない。そうしている間にどんどん視界が狭くなっていく。

携帯がなっている音が微かに聞こえた。誰だろうか……それも分からず、私の目の前は真つ暗になった。

桐ヶ丘中学校の本校舎から離れた山の上に隔離されたE組ではトラブルが起きてい

た。

プロの殺し屋だが、今はE組の英語教師として在籍しているイリーナ先生ことビッチ先生は三日前からE組に来ていないのだ。連絡も繋がらず、生徒達は彼女の事を心配していた。

「イリーナ先生に動きがあつたら呼んで下さい。先生、これからブラジルまでサッカー観戦に行かなければ」

マツハ二十で飛ぶ超生物であるE組の担任、殺せんせーは窓から出て行つた。

E組の生徒に暗殺術を教える烏間先生も今は用事で出かけている。生徒だけになつた教室に不自然なく教室に入つて来た男がいた。

「僕は『死神』と呼ばれる殺し屋です。今から君達に授業をしたいと思ひます」

死神は律に画像を送り、それを表示してくれと言う。律は自分が移る画面からその画像に切り替える。そこに映っていたのは、紐で縛られたビッチ先生だった。

「彼女だけではありません。もう一人います。律さん、もう一枚もお願いします」

ビッチ先生からもう一枚の画像に切り替わつた。その画像の人物は、桐ヶ丘中学校の制服を着て、E組の生徒達を知る人物だった。

誰より早くに声を上げた者がいた。

「学さん！」

渚と竹林だ。

「彼女はこの件に無関係ですが、昔の知人として、調べたら君達とも関係があるとか。なので利用させてもらいました」

死神はE組に場所を知らせる地図を置いて消えた。

## 第二十四話 本物

暗い。何も見えない。

どこだろうと思ひ、ゴールの見えない道を歩いた。

歩いていると、いつのまにか景色が変わった。そこは私の部屋だった。そして、勉強机に向き合つて座っている少女は幼い頃の私だ。

「絵？」

絵を描いているようだった。そう言えばよく描いていたなと思ひだす。

幼い私に私の姿は見えていないようだった。

私は覗きこむように絵を見た。スケッチブックには物語に出てくるキャラクター達を描かれていた。E組の皆、暗殺者達、五英傑……できるだけ多くのキャラを描いているようだった。だが、その絵には不自然な点があつた。

「私がない……」

私がいいた場所には知らない少年が立っていた。いや、知っている。彼の名前は……。

「浅野、学秀……」

その名を口にした途端、景色がどんどんと遠のいて行つた。気が付くと目の前には



さっきの幼い私が立っていた。

「不自然何かじゃないよ。これが現実よ」

「現実……？何言つて、私は……」

「貴女は、浅野学秀じゃないわ。貴女は、中島海里でしょ？あそこは貴女の場所じゃない」

私はその先を聞きたくなくて耳を塞いだ。そんな事、無意味って分かっているのに。「この世界に貴女の居場所は存在しないのよ」

この場所から逃げたくて、その言葉が偽物だと信じたくて、私は走った。何も無い空間をただ走った。だが、その言葉は耳にこびりついて離れない。何度も何度も聞かせられるかのように私の頭の中で再生された。

「が……が……」

誰かの声が聞こえた。

私はその声に向かって走った。すると、光が見えてきた。光に近付いていくと声がクリアになっていった。

暗い場所がどんどん光に包まれていく。眩しくて目を閉じた。

「学さんー」

渚君の声で私は目が覚めた。

頭が痛い。

私のすぐ隣には鞆が置かれていた。無事で何よりだ。

周りを見渡すと、E組の生徒たちと、もう一人、E組の担任の超生物、殺せんせーがいた。

「すいません、浅野さん。私達の事情に関係の無い貴女を巻き込んでしまった」

「いや、別に……それよりもこの状況を何とか打開する方が先です」

冷静になれ。怯えてる暇なんてない。自分に言い聞かせて手の震えを止めようとする。

正直怖い。手汗はゲームでラスボスと戦うよりびっしりだ。

落ち着いて深呼吸。

私の腕には手を縛っていた何かの跡が残っている。殺せんせーが外してくれたのだろう。

「君達の事だ。もう策を思いついているんだろ？」

「あ、ああ。だが……」

磯貝君が話すには、超体育着は迷彩効果に優れている為、壁の色に同化して隠れるらしい。殺せんせーは保護色になれるので大丈夫だが、もちろん、私はそんな事ができないため、できない。

「どうすりゃあ……」

悩んだ結果、一応、染料を服にかけて、正確に見えない一番安全な場所に立ち、私の姿を隠せるように私の前に一人が立つという事になった。

安全な場所というのは監視カメラの真下だ。そして、私の前に立っているのは、赤羽君である。

女子は肩車の二段、三段目の上に乗ることになったため、女子では無理という事になり、体格のある男子は一段目で土台になることになった。そして、余ったと言うか、面白半分というか、そんな感じで赤羽君になってしまったのだ。配置を決めている時、何人かはニヤニヤしていたからだ。

赤羽君はキャラクターの中でも一位二位を争う人気キャラで性格はともかく、顔は凄くイケメンだ。思わず下を向いてしまう。

中央に置いた首輪が爆発した。死神を欺けたという事だ。しばらくすると、檻の先から水に何かが落ちる音が聞こえた。

急がず、一人ずつ慎重に下りる。赤羽君は私の前からすぐにどいた。耳が少し赤かった。やはり彼も緊張することがあるんだ。私も心臓がまだバクバク鳴っている。

死神と烏間先生の戦いを殺せんせーは実況したが、下手くそだった。

殺せんせーは服からトマトジュースを取り出し、飲むと、一本の触手を檻の隙間を通

した。恐らく、死神の技を偽造するんだろう。

死神を倒した後、端末を持った烏間先生が檻の前で唸っていた。殺せんせーだけを閉じ込めて、殺せないか……とでも悩んでいるんだろう。

無事、檻から出られた私達は気を失った死神を目の前にして立っていた。

「ああ……貴方だったのか」

私はしやがみ、死神の頬に手を当てる。

どこかで気がついててもよかつたはずだ。ヒントだつてあつた。

——誰かに見てもらえるだけでとても幸せな事じゃないのかな。

彼はずつと言っていた。でも、私はそれに気付いてあげられていなかった。無責任な

言葉を言ってしまったからだ。

「何が、私は貴方を見ていますだよ……何も、見えていないじゃないか」

私は疲れていたのか、糸が切れるように横に倒れた。その時、温かい手が受け止めてくれた。

あたたかい……。

E組で起こった事件は解決し、英語教師であるピッチ先生も次の日から学校に来るぞうだ。

「それにしても、死神が浅野さんを……」

「彼女には全て話さないとな」

その学はカルマの腕の中で眠っていた。長い髪は解け、カルマの肩にかかっていた。彼女は怯えるどころか前を向き、どうすればいいか声に出していた。流石だなど納得する生徒が多かったが、一人を除いてはそうは思っていなかった。

「さて、浅野さんを家まで届けないといけませんね」

「せんせー、俺も連れていくよ」

カルマは学を背負って、地下から抜け出した。

街灯の明かりだけが暗い夜道を照らしていた。

二人は無言だった。

カルマは空に浮かんでいる三日月を見上げて言った。

「俺、実は浅野さんと前に会っているんだ。俺がまだ停学中の時」

殺せんせーは何も言わず、相槌を打った。

「泣いてた。何で泣いてたか知らないけどさ、髪が、綺麗だなんて思ったんだ。その時は誰か分からなかったけど、学校から帰っている時にまた会ったんだ。あの髪を憶えていたから。でも相手は知らないみたいだった。それに名前まで変えてさ」

名前を変えた学の名前は諸星学といつていた。ご丁寧に浅野学とはよく間違えらるると付け加えて。

「夏祭りの時も会ったんだ。諸星学で。気になったから聞いたんだ。ぶつかつたのは君かなつて。彼女は違つて言つた。A組でリーダーとして生徒を率いている浅野学と、E組のことを悪く言わない諸星学とどつちが『本物』なのかなつて」

学はカルマの背中で寝息を立てていた。

カルマの話を見せんとせーは黙つて頷いてると浅野と書かれた表札の家の前に来た。インターホンを押すと学の母と思われる人と柵ヶ丘中の理事長である浅野學峯が出てきた。あの理事長も娘の行方が分からないことに慌てていたのか髪が乱れていた。

「すいません、浅野さんを巻き込んでしまつてしまいました」

「そうですか……この話はまた後日、防衛省の方も交えて」

はいと殺せんせーは言つた。

カルマは背負つていた学を下ろすと、学の母、結が学を抱きかかえ、泣いていた。

「赤羽君だね。娘のこと、ありがとう」

「いえ……」

その時の顔は理事長では無く、一人の親として。

二人は家族の時間を邪魔する訳にはいかないとそつと立ち去つた。

殺せんせーは駅の近くで別れ、カルマは家に帰る為、駅の改札を抜けた。

ホームには一人の少年が立っていた。水色の髪をした少年だ。

「渚君、まだ帰ってなかったの？」

「ちよつと気になってさ」

学のことだろうとカルマは考えた。

渚と浅野学は知り合いのようだった。渚だけでなく、竹林もだ。死神が現れ、学の写真が映し出された時、一番最初に二人が声を出したからだ。

電車が止まり、扉が開くと、二人は歩き出した。それから、一人が電車から降りるまで一言も話さなかった。

## 第二十五話 幼い私

目を覚ますと、そこは自分の部屋だった。

部屋の窓に太陽の光が入っていた。つまり朝。学校に行かないとなと思い、体を動かそうとするが、力が入らなかった。

声も上手く出せない。寝ている時間が長かった所為だろうか。

ドアが開いた。入って来たのは家にいるはずがない母だった。

「目を覚ましたのね。貴女のことだから学校のことを心配しているのかもしれないけど、今日は休むって連絡入れといておいたからゆつくり休みなさい」

そうだ。私、死神に捕まっていたんだ。そして、死神のことを……本当の名前を思い出した。世間って狭いなあ。こんなにも近くにいるものなんだと実感した。

彼は、今頃悪い奴に目をつけられているのだろう。

「りんご、剥いたから置いておくわね。無理しないで良いからね」

母は優しい。父は……どうなんだろうか。

また眠たくなってきた。今日だけはいいだろう。私はそのまま意識を手放した。



ああ、またここか。真つ暗なこの場所。私の目の前には幼い私。  
「家族に心配かけたのね」

その通りだ。母に迷惑をかけてしまった。前に帰って来た時に大切なプレゼンがあるから頑張ると張り切っていたのに。

「そうそう、貴女のお父さんも心配していたわよ。警察に連絡して、ずつとりピングで連絡を待っていたのよ」

「父さんが？ありえない」

「貴女がそう思い込んでいるだけじゃないの？」

父とは親子での会話をしたことがない。するとといえば勉強の話だけだ。成績、成績それだけだ。

親子の会話といえば、友達のことを話したり、あれ欲しいってねだったりするんだろう。

「というか、私、そんな喋り方しないんだけど」

「いいじゃない。私はこつちの方がしつくりくるのよ」

私としては違和感ありまくりだ。一応自分でもあるし……。

「それもあるんだけど、ここ、どこなの？真つ暗な場所……」

「さあね、私にも分からないわ」

「分からないって、私の心の中とかそういうのじゃないの？」

「何その厨二設定。そんなわけないじゃない」

厨二設定って……これ本当に私だよな？

二次元ではよくある「心の中」それでもないのならここは一体どこなんだろう。

「そろそろ時間ね」

「時間って、どういう……」

どんどん視界が狭くなっていく。幼い私何か言っていたが、聞こえなかった。

……。

次の日、学校に行くと同じクラスの子に心配された。別に仲が良い訳ではないのだが

最近、E組といういろいろあったが、もう十月。中学三年生の私達にはやるべき事がある。

それは、進路だ。

本校舎の生徒の大半はそのまま高校に進む。大半と言っても、この柵ヶ丘中学校は全国でも有名な私立中学だ。そこからエスカレーター式で行ける柵ヶ丘高校に行かない人はいないと言ってもいいだろう。

私は紙に柵ヶ丘高校の項目に丸をつけた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

私はいつもの店で紅茶を飲み、ケーキを食べていた。

店の入り口のドアが開く音がした。客が来たようだ。その客はカウンター席の私の隣に座った。

「久しぶり、でもないかな？」

「そうだね。あの時は驚いたよ」

「ははっは、それは私もだよ。竹林君」

彼と会うのは、死神に捕まった時だ。あの時の私は三年A組の浅野学としてだ。

正直言うと、死神が私を攫った理由は分からない。私と彼が会ったのはもう四年くらい前だ。彼が死神を名乗るだけある。私が言ったのは「浅野学」という名前だけ。それだけでよく調べたものだ。

学校に行った翌日、防衛省から説明があった。

「地球が爆破ですか……」

「信じられないかもしれないが、事実だ。君も見たと思うが、あの黄色いタコは月を破壊した本人だ。そして、E組の生徒達は四月から奴を殺すために暗殺をしている」

知っていた話だ。驚いた反応を取ったが、自分でも少し不自然だったと思う。変に思

われていなければいいのだが。

防衛省からは口止め料として多くの札束が用意されたが、私は断った。

「私がそれを言っても何のメリットもありませんから。それに、薄々感じていました。父が何かを隠している事くらいは」

その後、死神について知っている事を話した。それからは特に連絡はない。E組からもだ。私が心配しているのはそこではない。この後に死神が出てくる。しかもラスボスとしてE組の前に立ちはだかるのだ。私はこの物語で重要な部分に関わってしまった。この後の話に影響が出なければいいが。

## 第二十六話 本気で

中学校生活最後の行事は文化祭だ。

柗ヶ丘中学校の文化祭は規模が大きいものでこの先の就職にも関わってくるほどだ。

今日は有名の飲食店にスポンサー契約をしに行くのだ。

「柗ヶ丘の学園祭は全国的に有名だし、我が社の商品を使ってもらえば宣伝効果にも抜群だ」

「ありがとうございます」

正直、こういうのは固いから嫌なただけどなあ。まあ、これで飲み物と軽食はタダで提供してくれるからいいんだけどさ。

A組の店はイベントカフェだ。父の伝手で知り合った友人のアイドルやお笑い芸人も無償で参加してくれるとの事だ。

あかりちゃんは私の事を知っているんだろう。気を使っているのか、それともE組の皆にばれたくないのか話しかけてこない。恐らく、後者の方だろう。

今も彼女とは連絡を取り合っている。もちろん、雪村あかりとしてだ。私はメールで学園祭の事を書いた。

『今度、うちの学校で学園祭がやるんだ。時間があつたら来てね』

数分後、短いメッセージが届いた。

『うん、分かった！楽しみにしているね！』

彼女が真実を知った後、彼女は私にも話してくれるだろうか？

文化祭当日。

開始早々、A組の出店に多くの人が入って来た。

うちの店は一回入場五百円。客席を半分に分け、片方のステージが終わったら、仕切りを閉じて客を出す。すぐさま反対のステージで次が始まる。このステージで私もショーを披露する予定だ。

ステージの裏に行き、ギターを確認する。ギターも格好いいが、私はピアノ派だ。

「じゃあ、一、三曲弾いてくるからその間に準備しておいてくれ」

前世の私は女子にしては手が大きかった。小学生の時に男子に手がでかいと言われて初めて気付いたくらいだ。だが、今はそうでもない。ピアノのオクターブを弾く時はギリギリ届くくらいだ。それに比べ、ギターは手が大きいとか短いとかそこまで左右されないからいい。練習すれば指もなれるからだ。

三曲弾いたところで、ギターやドラムを用意した五英傑達も出てきた。ここからが本

番だ。

一日目はかなり良い滑り出しだった。

二日目は一日目に出たアイドルではなく、他のアイドル達に出てもらい、売上を上げた。結果、三年A組は高校の三年生を差し置いて一位になった。そして、E組の彼らはどうと、上位三位だ。

文化祭が終わった後、あかりちゃんからメールが来た。

『文化祭凄かったね！学ちゃんのクラスも見たよ』

文末にはいいねスタンプが押されていた。

その後、私達五英傑は理事長室に呼ばれた。

「私達は努力の全てをつぎ込みました。勝利に満足しています」

「ほう……だいぶ接戦だったようだが」

「それだけE組に戦略があったという事。圧倒的大差をつけるのはほぼ無理かと」

彼らは第二の刃を鍛え、そして失敗を学んだ。新たな敵と戦った。彼らは成長した。そんな彼らに大差をつけるのは難しいことだ。だが、この理事長は違った。

「相手は飲食店だ。悪い噂を広めるのは簡単だし、食中毒なら命取りに出来る。君は害する努力を怠ったんだ」

この理事長はどうやら、どこまでも自分の教育を貫きたいらしい。その為にはE組を

生贄にしなればならないと。

「強敵や手し……いや、仲間との縁に恵まれたからこそ強くなった」

手下と言いかけたのは許してほしい。

「弱い敵に勝ったところで強者にはなれない。それが私の結論であり、それは、貴方の教える道と違う」

この結論は小さい子でも分かることだ。ゲーム初心者以下の知識だ。

すると、理事長は全く目が笑っていない笑顔で言った。

「浅野さん、三分ほど席をはずしてくれないか。友達の四人と話がしたい。何、ちよつとした雑談だ」

私は外に出る。

皆には苦しい思いをさせてしまう。だが、仕方がないと言えば仕方がない事だ。しばらくの間、耐えてもらなければ……その為にも私も最後までやらなければならぬと。

三分が経った後、四人が出てきた。四人は殺意で溢れていた。

「何を、したんですか」

強めの口調で私は理事長に言う。

「ちよつと憎悪を煽つてあげただけだよ。君の言う『縁』なんて……二言三言囁くだけ崩壊する」



理事長も今回は本気なようだ。

私にはこの人を倒す事はできない。私が倒しても意味がない。だから、彼らに……E組に託すしかない。

翌日の一時間目から理事長先生だ。

理事長の教え方は確かに分かりやすい。いつもの数学教師よりだ。だが、速い。これでは誰もついてこれない。それをこの先生は限界を超えさせようとする。私にはとても理解できない。

「浅野さん、君は帰って自習でいい。皆を上を導くのは私がやっておくから」

私は荷物をまとめ、教室を出た。

E組に会うのは放課後が良いだろうと思い、一度家に帰った。

「学さん、今日は帰りが早いですね」

「うん。ちよつとね」

この時間帯は家政婦の佐々木さんが掃除をしている。

部屋に行き、制服を脱いで部屋着に着替えた。

参考書を広げて勉強を始めるのではなく、これからの流れを確かめるためにノートを開いた。

最近は前に比べて記憶が穴だらけだ。それだけでなく、前世の事なのだが、友達や親の顔や名前が思い出せなくなつた。親の名前はまだ憶えているが、漢字を書いてと言われたら書けないだろう。

「期末テストの数学の問題の答えだけ書いてある……」

確か、とても難しい問題だつたと言う事は憶えている。ちなみに答えは  $a \cdot \frac{1}{2}$  だ。今の学力で解けるかと言われたら分からないだろう。この問題は解いては駄目だ赤い鉛筆で大きく書かれていた。

六時間目が始まる前の時間ぐらいに私は制服に着替え、学校に向かつた。

今年の十一月は寒い。私はマフラーに顔をうずめた。

一時間経つた頃に笑い声が聞こえてきた。E組だ。

「何か用かよ?」

竹林君以外は死神の事件以来だ。そんな事もあつて少し表情が固かつた。

「君達に依頼がある。単刀直入に言う。あの怪物を君達に殺してほしい。もちろん、物理的に殺してほしいわけじゃない。殺してほしいのは、理事長の教育方針だ」

竹林君に、渚君に言つてきた事。それがようやく果たされる。

片岡メグさんが父親に振り向いて欲しいのとはと言つてきた。そうだったのかもし

れない。父に、認めて欲しかったのかもしれない。もう「親の顔」は思い出せないから。

「時として敗北は、人の目を覚まさせる。だからどうか……」——「正しい、敗北を。私の仲間」に父親に」

私は深く頭を下げた。今だけ、浅野学秀ではなく、浅野学として。

「え、他人の心配している場合？ 一位取るの君じゃなくて俺なんだけど」

カルマ君は舌を出して挑発した。その後には磯貝が上手くまとめてくれた。

「余計な事、考えないでさ。本気で来なよ。それが一番楽しいよ」

カルマ君は親指で首を切るようにして言った。

「面白い。ならば、私も本気でやらせてもらおうか」

「本気で」

「残念ながら私は本気ではできなさそうだ。」

## 第二十七話 期末テスト

期末テスト当日。

A組の教室では私を除いて全員が殺意で溢れかえっていた。

吐き気がするくらい彼らは狂っていた。これが最善と言えるのだろうか。いや、違  
う。どんなに優れた殺し屋でもずっと殺気を出すなんて事はできない。彼らの持つ殺  
意は鈍らの刃だ。

一時間目は英語。

担当の先生の合図で全員が問題用紙を裏返し、ペンを手に取る。

ザツと問題を眺めたが、問題の数が多すぎる。長文問題も多い。これを五十分で解け  
というのはかなり難しい。だが、止まっていられる時間はない。早く問題を読み、誤字  
がないように正確に単語を並べていく。

手を止めることなく、書き続け、全ての問題が解き終わった。残り十分くらいだ。あ  
とは見直しと自己採点で終わりだ。

テスト終了を知らせるチャイムが鳴り響いた。

「ふう……」

テスト終了十分前に終わらせられたのはよかった。自己採点は一応満点だったが、実際のところは分からない。

一息ついて、十五分後にテスト開始。次は社会。地理と歴史、公民のごちゃ混ぜテストだ。これはかなり手こずるかもしれない。前世では社会は得意科目だった。自信はある。

理科、国語と続いていき、最後は数学。

これで全てが決まる。

ラスト前の問題まではいい。ここまできたら次は見直した。最終問題を除いた問題は全問正解。そして、最終問題は式の途中で時間オーバーこれが私の筋書きだ。

よし、ここまでの問題は自己採点で全問正解。後は、この問題の長い式をタラタラと書くだけだ。

この問題が最後。この問題が最後。

時計の秒針がカチ、カチと動いていく音が聞こえる。あと五分ほどで試験終了だ。

「そっ、までー」

先生の合図でペンを止めた。

一番後ろの席の人が解答用紙を回収して、全ての教科のテストが終わった。

休み明けの月曜日、各教科の先生からテストが返却された。

私の場合、国語、英語、理科、社会は百点だ。最後の数学で全てが決まる……と言いたい所だが、結果は知っている。私は意図的に最後の問題を解かなかったからだ。

数学科のテストは九十七点。総合点数は、四九七点だった。

学年順位が発表された。学年トップは赤羽カルマ、トップ50のほとんどはE組が独占していた。

「君達の勉強じゃ勝てなかった。それだけの事だ」

五英傑の四人は五番以内から外されていた。

「私が導く。だから君達も……私を支えてくれ」

すると、背後から寒気が襲った。いままで感じたことない嫌気だ。

私はE組の皆にはああ言った。

——時として敗北は、人の目を覚まさせる。だからどうか……正しい、敗北を。私の仲間に父親に。

だが、理事長はこんなもので終わらない。無理にでも勝利を掴もうとどんな事でもやるだろう。生徒達がどうなるうとも——。

先に『敗北』という言葉を知った五英傑達が言うのと、他の皆も一緒に頭を下げて言った。

「どうぞ、E組に落として下さい。そっちの方が、僕達は成長できる気がします」

私は皆を代表して、言葉をまとめようと口を開いて、言葉を出そうとした時、一瞬の事だった。頬に痛みが走り、投げ飛ばされるように机の方に転がった。

理事長は何をしたのか分かっていないようだった。

唇と鼻の血管が切れ、血が出ていた。それを袖で擦るように振り払う。

「やっど、父親らしい貴方を見られた気がする」

蓮が肩を貸してくれた。

私は皆に連れられ、保健室へ向かった。その間、理事長が何を考えていたなど私が知る由も無い。

## 第二十七話 家族

私が保健室を出たのは、六時間目の途中だった。

保健室の先生が言うには、クラスの皆がとても心配をしていたと。無理に授業に出なくてもいいと言ってくれた。

蓮達が置いて行ってくれた鞆を持ち、保健室を出た。

私が向かったのはE組の校舎だ。それにしてもこの坂道はかなりきつい。彼らはこの坂を半年間登り続けていたのか。

物語が進むのなら、この後、父が殺せんせーに暗殺をしかける。そして、殺せんせーとデスマッチをし、結果、父が死ぬ結末だけが残る。それは殺せんせーが阻止してくれるからいいのだが、やはり心配だ。自分の父親が死にかけるなんて未来を知っているんだから。

ようやくゴールに着いた。

E組の校舎の半分は潰れていた。そして、生徒達は全員外に出ていた。もう暗殺は始まっていたのか。



物語の中では理事長先生は本当の死を覚悟したのだろう。自分の教育が思い通りにいかないのなら家族なんてどうでもよかったのだらうか。

——この世界に貴女の居場所は存在しないのよ。

幼い自分の言葉。

彼女の言う通りだ。私なんていない。浅野学秀という人物は存在しない。その代わりに、浅野学がいる。私がいる。もう線路とか、物語とかどうでもいい。私はここにいる。浅野学という存在がいる物語にすればいいんだから。

私をずっと縛っていた何かがほどけた。

鞆を捨て、走り出す。校舎の中に入り、E組の教室を目指した。

曲がり角を曲がり、見えた教室の扉を開けた時、父は、問題集を開いた時だった。

バーンと大きな爆発音が鳴った。

私は逃げるのでも、叫ぶのでもなく、飛び出した。その時、何も考えていなかった。

「お父さん！」

一瞬、光の中で父が驚いた顔をしていたのが見えた。

父を庇うように抱きついて、目を瞑っていた。だが、何の衝撃も無ければ痛みも無かった。恐る恐る目を開けると、膜のような物が体を覆っていた。

知っていた。だからこそ飛び出した。

私は殺せんせーが喋るよりも先に父の頬をグーで殴った。平打ち？そんなもので済ませるものか。

「何で、死のうとしてんだよ！母さんだって、私だって、家族なんかより教育の方が大切だっていうのかよ！勉強の前に大切な事があるだろうが！それを、教えるのが……教師じゃねえのかよ！」

言いたい事を全て言い切った。父に敬語を使わない日なんて来ないと思っていた。今回だけは別だ。父を殴るのも、父に敬語を使わないのも。

滅多に表情を変えない父が驚いている事は見てすぐ分かった。そして、後ろでそわそわしている殺せんせーも。

「貴方が自爆を選ぶことは分かっていました。自分の命を使っても教育の完成を目指すでしょう。もちろん、間違いとは言っていません。ですが、皆さんのように貴方の事を大切に思っている人がいる事も忘れてはいけません。そして、それを生徒達に伝えていくのが私達の役目でもあるのですよ」

私は立ち上がり、父に手を差し出す。父は自分の手をしばらく見つめてから私の手を取った。

父が殺せんせーと距離を縮め、話し出した。この話は私が入っていい話ではない。数歩下がり、二人の話を聞いていた。

「たまには私も殺りに来てもいいですかね」

「もちろんです。好敵手にはナイフが似合う」

今まで見た事がない父の清々しい顔だった。父も何かがほどけたのだろう。そして、親子そろってこの怪物先生に手入れされてしまったのだ。

二人の話が区切りをついたところで私は一歩前に出た。

「何か言うことはない？」

あれだけ言ったんだから答えがほしい。答えが。

「……すまなかった。『学』」

予想していなかった答えだった。

私の記憶の中で、名前を呼ばれたことがあるのは数えるほどだ。そして、この数年、名前と呼ばれていなかった。

ここまでの答えを出してくれた。私が返す返事はこれだけだ。

「ゆるす……でも、殴ったことは謝らない。これでおあいこだから」

この時、私はようやく子供らしいことを言えたのではないかと思った。

後ろからめそめそと泣く声が聞こえたので振り返ると、殺せんせーがハンカチを持って泣いていた。

「よかったですねえ。それはそうと、学さんが飛び出してきた時、先生びっくりしまし

た。一步間違えていたら大怪我をしていましたよ。これからは気を付けてください」

先生の顔の色が紫に変わった。

このクラスがここまで変わったのもこの先生がいたからだとよく分かる。

「はい。すいませんでした」

こんなに生徒思いな先生はいないだろう。いや、少し訂正。ここにももう一人いた。

珍しく、父が車に乗せてくれた。

車の中は静かだった。誰も口を開こうとはしない。そんな中、言葉を出したのは私だ。

「父さん、お願いがあるんだけど」

「何だい？言ってみなさい」

ここにいるのは教師ではなく、父親としていることに私は気付いた。

「一つは……」

普通の家庭ならありふれたことなのかもしれない。でも、私の家にはそんなことはなく、こんなお願いをするのは恥ずかしいという気持ちもあった。だが、言わなくちや意味がない。

私は深呼吸をしてから自分の願いを口にしました。

「父さんと母さんと三人でご飯が食べたい、です」

最後、やっぱり恥ずかしくなつて声が小さくなつてしまつた。

「はっはは、分かつた。で、もう一つは？」

“これ”は家族とかそういうものとは全く関係がないのだが、“これ”はこの学校の権力者である父にしか頼めないことだ。

「もう一つは、―――」

二日後、今日は母が帰ってくる日だ。

ドアが開く音がし、私はリビングを飛び出し、玄関に行き、母を迎えに行った。

「お帰り」

「ただいまーん？いいにおいがする。学が作ったの？」

「うん。私と」

父さんと一緒にと言おうと思つたが、ちよつとしたドツキリということでも黙つておくことにした。私は母の手から荷物を取り、リビングへ急がせた。

リビングに入ると、父がエプロンを脱いで椅子にかけていた。盛り付けはもう終わつたみたいだ。

「まあ！お父さんと作ったの？」

「うん、メニユーは父さんが」

私は父に視線を移すと、いつもの不気味な笑顔ではなく、清々しい顔で笑って座ろうと言った。

母は分厚いコートを脱ぎ、椅子にかけて座った。

高級レストランみたいにナイフとフォークが横に並んでいるというわけでもなく、いつもの高いお肉というわけでもなく、コーンスープにハンバーグ、ポテトサラダと炊きたての白ご飯という家庭料理だった。

手を合わせ、三人同時に食べ物への感謝の言葉を言った。

「いただきます」

いつものご飯よりもおいしく、温かく感じた。

箸を進めていると母がクスツと笑った。私はどうしたのと母に聞いた。

「このメニユーはね、父さんと初めてのデートで食べたのと同じなのよ」

「やっぱり覚えていたんだね」

「もちろん、今でも覚えているわ」

今の父からは考えられないが、当時、父と母の恋愛はかなり順調に進んでいたみたいだ。

「で、その後どうなったの？」

「それがね……」

私はずっとこうやって三人で話したかった。  
ようやく私達は、家族になれた。